

上唐山遺跡 1

上唐山遺跡 1

—第 1 次調査—

大野城市文化財調査報告書 第192集

大野城市文化財調査報告書 第192集



大野城市教育委員会

2 0 2 2

大野城市教育委員会

かみ から やま い せき
上唐山遺跡 1

— 第1次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第192集



2022

大野城市教育委員会

序

福岡県大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。

今回報告する「上唐山遺跡」は、大野城市北東部の乙金山に位置しています。乙金山の麓には、県指定史跡「善一田古墳群」をはじめ、6世紀後半から7世紀にかけての古墳が数多く築かれています。今回の調査においても、3基の古墳が確認されました。

特に1号墳は、標高156mに位置し、周辺の古墳と比べても非常に高い場所に造られていました。古墳からは福岡平野や玄界灘を一望できるだけでなく、若杉山をはじめとした糟屋方面の山々も見渡せることから、眺望を意識した場所に造られたものとみられます。

本書が学術研究はもとより、地域の歴史や文化財の理解と認識を深める一助となり広く活用されることを願ってやみません。

最後になりますが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご指導を賜りました関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和4年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 伊藤 啓二

例 言

1. 本書は、福岡県大野城市大字乙金 1121 番 1 所在の上唐山遺跡第 1 次調査にともなう発掘調査報告書である。
2. 調査は、事業者である西日本高速道路株式会社の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査および整理作業は山元瞭平が担当した。
4. 遺構実測および地形測量は、山元、澤田康夫、齋藤明日香、木原 堯(現八女市教育委員会)が行った。
5. 遺構写真は山元が撮影した。
6. 遺物写真は(株)写測エンジニアリングに委託し、牛嶋 茂が撮影した。
7. 遺物実測は古賀栄子、小嶋のり子、山元、齋藤が行った。
8. 遺物拓本は古賀、小嶋が行った。
9. 遺構図および遺物図製図は小嶋、山元が行った。
10. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』(農林水産省技術会議事務局監修)を使用した。
11. 本書図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標(第Ⅱ系)による。
12. 本書の第 2 図は、国土交通省国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。
13. 須恵器蓋杯の名称については、凡例 1 のとおりとする。
14. 古墳の各部名称については、凡例 2・3 のとおりとする。
15. 本書に掲載の出土遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会が保管・管理している。
16. 本書の執筆および編集は山元が行った。

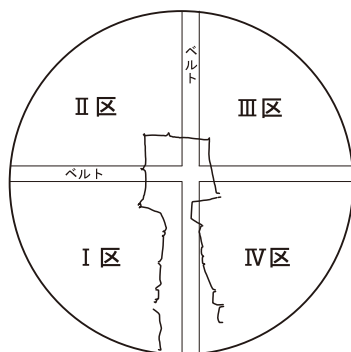
杯 H



杯 G



凡例 1 須恵器杯類の名称



凡例 2 墳丘の部分名称



凡例 3 石室の部分名称

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査経過	1
3. 調査組織	1
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
III. 調査成果	
1. 調査の概要	7
2. 遺構と遺物	8
IV. 総括	
1. 調査の成果	21
2. 古墳群の位置づけ	22

挿図目次

第1図 調査対象地位置図(1/1,500)	3
第2図 周辺遺跡分布図(1/25,000)	6
第3図 1号墳現況測量図(1/100)	7
第4図 1号墳墳丘遺存状況図(1/100)	8
第5図 1号墳墳丘土層図(1/60)	9
第6図 1号墳周溝出土遺物実測図(5・6は1/4、他は1/3)	10
第7図 1号墳石室実測図(1/60)	12
第8図 1号墳玄室遺物出土状況(1/30)	13
第9図 1号墳玄室出土遺物実測図(1/2)	13
第10図 1号墳閉塞石実測図(1/60)	14
第11図 1号墳羨道遺物出土状況(1/30)	14
第12図 1号墳羨道出土遺物実測図(1/3)	16
第13図 1号墳周溝・羨道土層図(1/60)	17
第14図 2・3号墳現況測量図(1/150)	18
第15図 2号墳調査後測量図(1/100)	19
第16図 2号墳周溝土層図(1/60)	20

第17図	2号墳出土遺物実測図(1/3)	20
第18図	1号墳墳丘復元図(1/150)	21
第19図	上唐山遺跡周辺の古墳分布(1/5,000)	23

表 目 次

第1表	出土遺物観察表	24
-----	---------------	----

図 版 目 次

図版 1	1号墳全景写真(南から)	
図版 2	(1) 1号墳調査前全景①(南から)	(2) 1号墳調査前全景②(南から)
	(3) 1号墳墳丘東西土層(南西から)	
図版 3	(1) 1号墳墳丘南北土層(西から)	(2) 1号墳周溝土層(南から)
	(3) 1号墳墳丘遺存状況(南西から)	
図版 4	(1) 1号墳羨道検出状況(南東から)	(2) 1号墳羨道右側壁(南西から)
	(3) 1号墳羨道左側壁(南東から)	
図版 5	(1) 1号墳玄室床面検出状況(南から)	(2) 1号墳玄門(北から)
	(3) 1号墳玄室奥壁(南から)	
図版 6	(1) 1号墳玄室右側壁玄門側隅部(北西から)	
	(2) 1号墳玄室右側壁奥壁側隅部(南西から)	
	(3) 1号墳玄室左側壁玄門側隅部(北東から)	
	(4) 1号墳玄室左側壁奥壁側隅部(南東から)	
図版 7	(1) 1号墳羨道遺物出土状況①(南東から)	(2) 1号墳羨道遺物出土状況②(南西から)
	(3) 1号墳羨道遺物出土状況③(南東から)	
図版 8	(1) 1号墳閉塞石検出状況(南東から)	(2) 1号墳羨道土層(東から)
	(3) 1号墳調査状況(南東から)	
図版 9	(1) 2号墳調査前全景(南西から)	(2) 2号墳周溝土層(南東から)
	(3) 2号墳完掘状況(南東から)	
図版 10	(1) 2号墳玄室落ち込み状況(南東から)	(2) 3号墳全景(南東から)
	(3) 2号墳から1号墳を望む(北東から)	
図版 11	(1) 1号墳羨道遺物集合	(2) 出土遺物 1
図版 12	出土遺物 2	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

上唐山遺跡は、大野城市乙金山から北西へ派生する丘陵上に位置する遺跡である。これまで発掘調査は行われておらず、分布調査により古墳の存在が知られていた。

対象地については、令和元（2019）年9月、法面保護工事の計画にともなって西日本高速道路株式会社より埋蔵文化財の照会があった。対象地については、平成21（2009）年に実施した分布調査により古墳が3基確認されており、これを踏まえ事業者と協議を行った。しかし、補強杭の打設およびセメントモルタルの吹き付けを行う計画であり、遺跡の保護は困難であることから、発掘調査を実施し記録保存を行うことで合意した。事業者から令和2（2020）年9月30日付けで文化財保護法第93条に基づく届出が福岡県教育委員会あてに提出され、同年10月8日付けで発掘調査の指示が出された。併せて、埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が大野城市教育委員会へ提出されたので、同年12月28日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。

発掘調査は、令和3（2021）年1月6日から同年3月29日まで実施した。調査面積は、事業対象面積4,023㎡のうち約1,000㎡である。整理作業については、令和3年度に実施した。なお、発掘調査および整理作業に関する費用は、事業者が全額負担した。多大なるご理解とご協力をいただいた西日本高速道路株式会社には記して感謝の意を申し上げたい。

2. 調査経過

発掘調査は、令和3年1月6日から開始した。対象地は、調査開始直前まで樹木が繁茂していたため、樹木の伐採と搬出が完了しなければ重機による試掘調査ができない状況であった。そこで古墳の調査と並行して試掘調査を行い、調査対象地を絞り込むこととした。尾根や丘陵裾部、古墳前面に広がる平坦部を対象に、重機や人力によるトレンチ調査を実施したものの、遺構は確認されなかった。そこで、工事の影響を受ける古墳（1・2号墳）のみを発掘調査の対象とした。

はじめに両古墳の現況測量を実施し、その後全体の調査が必要な1号墳の調査に着手した。当古墳はすでに玄室天井石や側壁の石積みが露出しており、墳丘が大きく流出していることが予想された。調査を進めると、羨道側壁も一部崩落していることが判明し、転落石の除去に苦慮した。また、石室自体も谷部に向かってゆがんでおり、パイプサポートを使用し安全に十分考慮しながら調査を進めた。2号墳は周溝の一部のみ工事の影響を受けることから、主体部は調査せず、周溝埋土の掘削と墳丘の一部断ち割りを実施した。その後、図面・写真等の記録を作成し、同年3月29日に調査および機材の撤収を完了した。

3. 調査組織

令和2・3年度における発掘調査および整理体制は次の通りである。

令和2年度（発掘調査）

教育長	吉富 修				
教育部長	日野 和弘				
ふるさと文化財課長	石木 秀啓				
係長	林 潤也	佐藤 智郁（～4月）	上田 龍児		
主査	徳本 洋一				
主任主事	秋穂 敏明				
技師	山元 瞭平	齋藤 明日香			
主事	鮫島 由佳				
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫	木原 堯			
会計年度任用職員（啓発）	山村 智子	深町 美佳			
会計年度任用職員（庶務）	西村 友美	三好 りさ	山上 敬子	井之口 彩子	

令和3年度（整理作業）

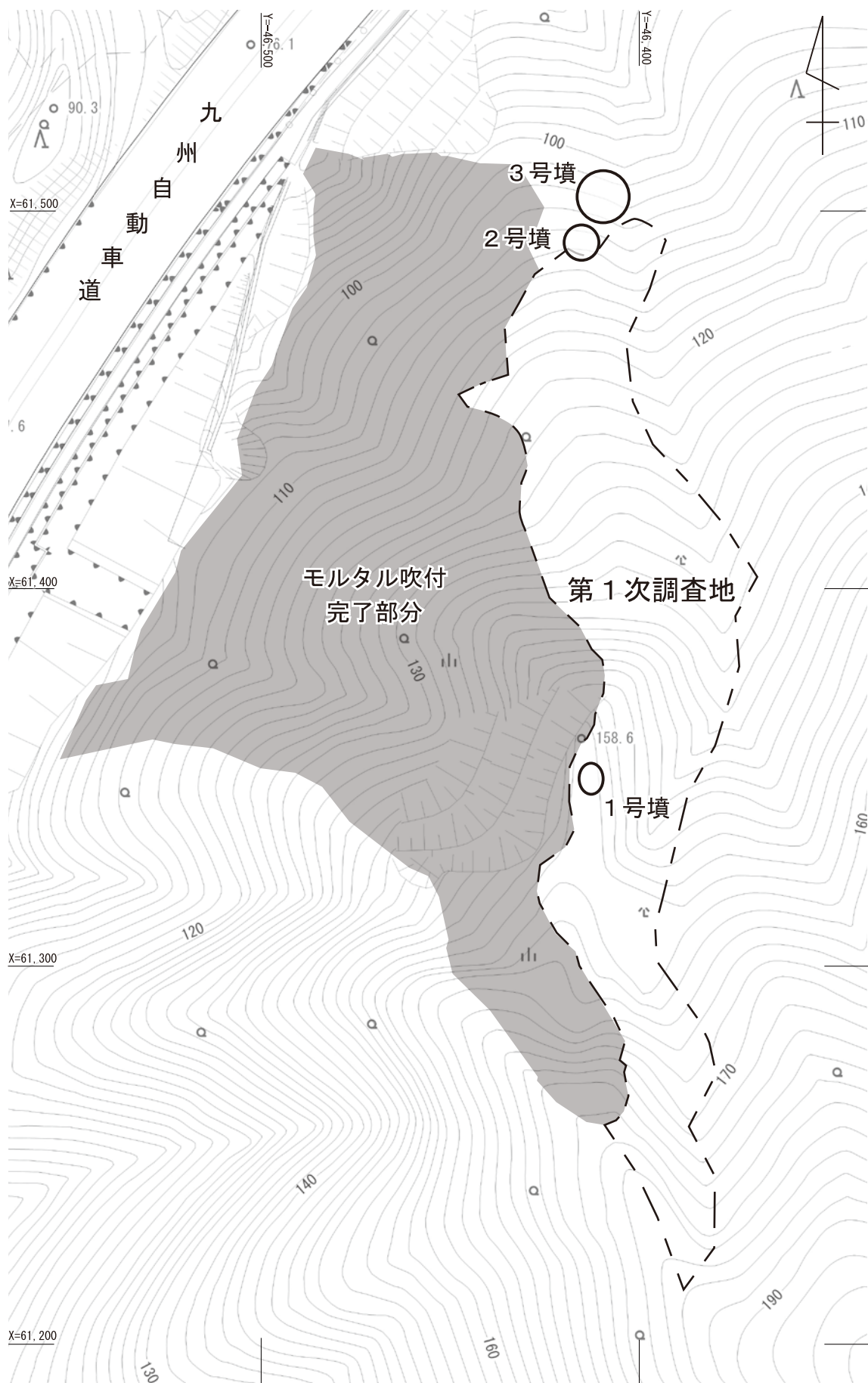
教育長	吉富 修（～6月）	伊藤 啓二（6月～）			
教育部長	日野 和弘				
ふるさと文化財課長	石木 秀啓				
係長	林 潤也	上田 龍児			
主査	徳本 洋一				
主任主事	秋穂 敏明				
主任技師	山元 瞭平				
技師	齋藤 明日香				
主事	鮫島 由佳				
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫	石川 健（12月～）			
会計年度任用職員（啓発）	山村 智子	深町 美佳			
会計年度任用職員（庶務）	荒牧 美佐子（10月）	光原 乃里子（～9月）	三好 りさ		
	野上 知則（11月～）	山上 敬子	井之口 彩子		

発掘調査作業員

浅田 ふえ	安部 芳範	大津 幸男	川崎 敏次郎	佐々田 薫	佐藤 寛行
佐野 敏彦	瀧口 松夫	田中 良一	綱嶋 年朗	仁田 幸男	森 一雄
山下 宏昭	吉田 秀俊				

整理作業員

小畑 貴子	古賀 栄子	小嶋 のり子	篠田 千恵子	白井 典子	津田 りえ
仲村 美幸	氷室 優	松本 友里江			



第1図 調査対象地位置図 (1/1,500)

Ⅱ．位置と環境

1．地理的環境

大野城市は福岡平野東南の最奥部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。市域は東側を月隈丘陵に連なる乙金山・四王寺山、南側を牛頸山に挟まれ、中央に御笠川が貫流する。山地は早良型花崗岩からなり、表層は風化が著しく真砂土となっている。山麓部から平地丘陵部にかけては段丘が発達し、高位段丘はよく開析されている。中位段丘は平坦部も多く、かつては畑地や水田であったが、現在は宅地となっている。平野部には御笠川が形成した沖積地が広がる。

上唐山遺跡は、市域北東側に位置し、乙金山から北西に派生する丘陵上に立地する。こうした丘陵地には、県指定史跡である善一田古墳群をはじめ、数多くの群集墳が築造されている。

2．歴史的環境

大野城市では、旧石器時代から近代にかけての遺構が多数確認されている。ここでは、上唐山遺跡の位置する市域北部の遺跡を中心に、その変遷について述べる。

旧石器時代 市域東部では釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡、松葉園遺跡、薬師の森遺跡において、ナイフ形石器や細石刃が確認されており、丘陵上で生活の痕跡が認められる。

縄文時代 市域では草創期の遺構・遺物は確認されていない。早期になると、釜蓋原遺跡、善一田遺跡、本堂遺跡といった丘陵上のほか、石勺遺跡といった沖積平野の微高地上にも展開し、押型文土器などが出土している。前期から中期にかけての遺跡は見つかっておらず、後・晩期の遺跡として、市域南部の塚原遺跡や日ノ浦遺跡において、竪穴住居が確認されている。

弥生時代 前期は、周辺では板付遺跡において環濠集落が成立し、拠点集落をなす。市域北部においては、川原遺跡や仲島遺跡などで集落が展開するがいずれも小規模である。北部の丘陵地では墳墓遺跡が卓越する。御陵前ノ椽遺跡や中・寺尾遺跡では、小壺を副葬する甕棺墓や土坑墓が確認されている。中期には、春日丘陵に大規模な集落・墳墓が展開し、多量の副葬品をとまなう王墓と目される甕棺墓も確認されている。市域北部では、丘陵部に位置するヒケシマ遺跡や森園遺跡、中・寺尾遺跡において集落や墳墓が見られる。一方、平野部では、仲島遺跡や石勺遺跡が展開する。

後期においては、中期の遺跡が継続するほか、村下遺跡や榎町遺跡で新たに集落が展開する。春日丘陵には青銅器やガラス製品を生産した遺跡が集中し、「奴国」の中心と考えられる。

古墳時代 福岡平野の古墳は、大きく那珂川と御笠川の二つの流域で捉えられており、大野城市は御笠川流域にあたる。市域北部の古墳は、乙金山・四王寺山の西側丘陵部に築造される。前期の古墳には御陵古墳群があり、割竹形木棺や箱式石棺を主体部とした円墳が確認されている。また、御陵古墳群から出土したと伝わる三角縁神獣鏡があり、有力な首長層の存在が想定できる。集落は、仲島遺跡や石勺遺跡、村下遺跡が弥生時代後期から継続し、瑞穂遺跡や原ノ畑遺跡でも集落が出現する。

中期には、5世紀前半に位置づけられる笹原古墳（円墳：30m）があり、5世紀後半には隣接し

て成屋形古墳（帆立貝式前方後円墳：32m）が築造され、御笠川流域の盟主墳と考えられる。また、古野遺跡では、5世紀後半から古式群集墳が形成される。当該期の集落は、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、原田遺跡などがあり、中でも石勺遺跡では初期のカマドや朝鮮半島系の軟質土器が確認されており、拠点集落と位置づけられている。

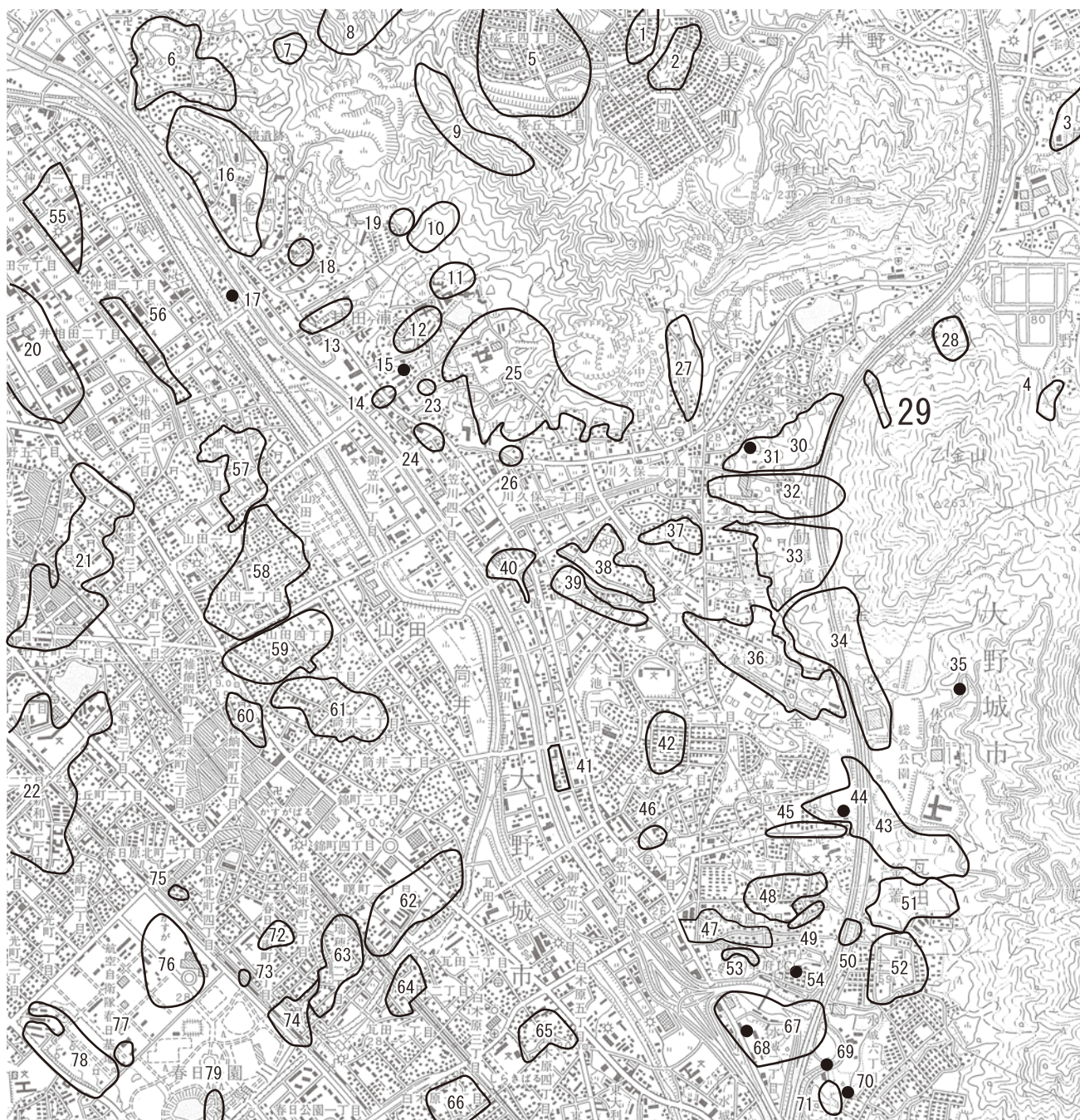
後期になると、乙金山・四王寺山の麓に大規模な群集墳が展開する。善一田古墳群や王城山古墳群が代表的で、6世紀後半から7世紀代にかけて築造・追葬が行われている。これら古墳群に対応する集落として、薬師の森遺跡があり、鉄器生産や須恵器生産といった手工業生産に関わる集落とされる。周辺には乙金窯跡や雉子ヶ尾窯跡などが操業しているものの、次代へは継続せず散発的な生産に留まる。一方、市域南部の牛頸窯跡群も操業を開始し、7世紀にかけて生産を拡大していく。

飛鳥時代 7世紀を代表する古墳に、大野城市と福岡市の境に位置する今里不動古墳がある。7世紀前半の大型円墳（30m）で、御笠川右岸地域の盟主墳である。乙金山・四王寺山麓における群集墳は、7世紀前半をピークに、次第に築造数が減少する。集落は、薬師の森遺跡や仲島遺跡などに展開する。7世紀後半を迎えると、白村江の戦い（663年）での敗戦を皮切りに、国家的事業として大野城・水城が築造される。大宰府においても政庁が整備される時期であり、律令体制への変革期と捉えられる。

奈良～平安時代 奈良時代になると律令国家の成立に伴い、大宰府を中心とした西海道一帯の支配体制が整う。水城を抜けて博多方面に通じる東西2本の官道が整備され、官道沿いには仲島遺跡、井相田C遺跡など大規模な集落が展開する。牛頸窯跡群では8世紀代に窯の数が増加し、小型器種を中心に大量生産が行われるが、次第に衰退し、9世紀中頃には操業を停止する。平安時代になると遺跡数の減少が認められ、集落の様相は判然としない。11世紀後半には、大宰府政庁が廃絶し、博多を中心とした貿易都市が形成される。

鎌倉～戦国時代 前代に比べて遺跡が増加する。薬師の森遺跡では集落を囲む区画溝や建物群、水田も確認されている。また、12世紀後半から14世紀にかけての土壙墓も多数営まれている。そのほか、瓦器生産を示す遺構・遺物も確認されている。御笠の森遺跡では、16～17世紀の方形区画溝が多数展開し、拠点集落と考えられている。

近世～近現代 後原遺跡や雑餉隈遺跡などで当該期の遺構や遺物が確認できる。また、雑餉隈遺跡では、新川と呼ばれる運河も見つかっているほか、薬師の森遺跡や原口遺跡、古野遺跡では近世墓も検出されている。近現代の遺構としては、王城山遺跡や古野遺跡などで太平洋戦争時の防空壕が見つかっており、証言や出土遺物から軍事的な疎開工場と想定される。また、御供田遺跡では、戦後にアメリカ軍によって整備された板付基地春日原住宅地区に関連する遺構も確認されている。



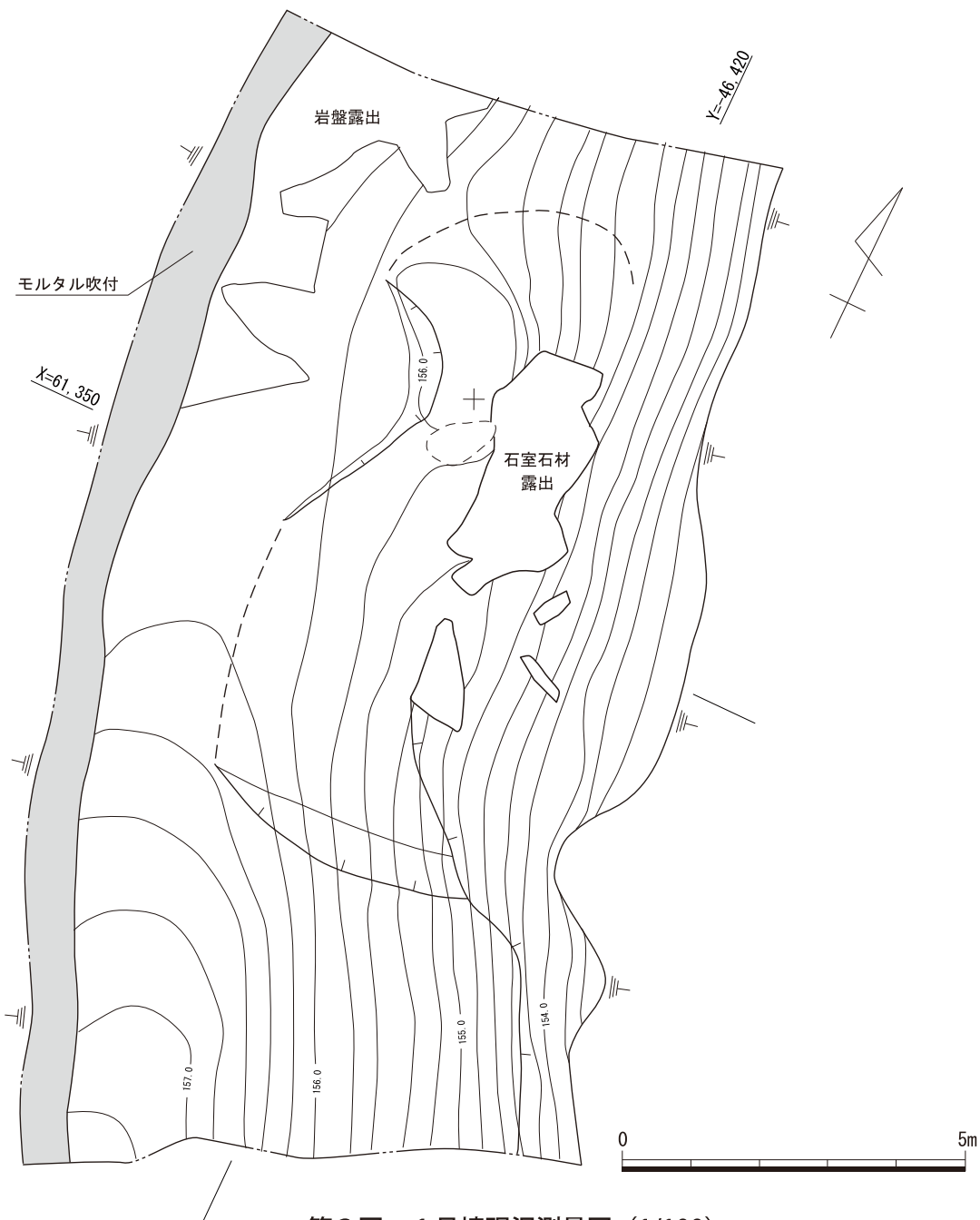
- | | | | | | |
|-----------------|-----------------|------------------|-------------|-------------|-----------------|
| 宇美町 | 13. 持田ヶ浦古墳群 E 群 | 27. 唐山遺跡 | 42. 銀山遺跡 | 57. 川原遺跡 | 71. 裏ノ田遺跡 |
| 1. 岩長浦古墳群 | 14. 持田ヶ浦古墳群 F 群 | 28. 乙金北古墳群 | 43. 雉子ヶ尾遺跡 | 58. 御笠の森遺跡 | 春日市 |
| 2. 観音浦古墳群 | 15. 今里不動古墳 | 29. 上唐山遺跡 | 44. 雉子ヶ尾窯跡 | 59. 宝松遺跡 | 72. 駿河 E 遺跡 |
| 3. 正籠古墳群 | 16. 金隈遺跡群 | 30. 善一田遺跡 | 45. 雉子ヶ尾古墳 | 60. 雑餉隈遺跡 | 73. 駿河 B 遺跡 |
| 4. 内野谷古墳群 | 17. 丸山古墳 | 31. 乙金窯跡 | 46. 原門遺跡 | 61. 村下遺跡 | 74. 原ノ口遺跡 |
| 志免町 | 18. 影ヶ浦古墳群 | 32. 王城山遺跡 | 47. 金山遺跡 | 62. 石勺遺跡 | 75. 駿河 D 遺跡 |
| 5. 桜ヶ丘古墳群 | 19. 堤ヶ浦古墳群 | 33. 古野遺跡 | 48. 原田遺跡 | 63. 瑞穂遺跡 | 76. 駿河 A 遺跡 |
| 福岡市 | 20. 井相田 C 遺跡群 | 34. 原口遺跡 | 49. 曲り目遺跡 | 64. 国分田遺跡 | 77. 先ノ原 B 遺跡 |
| 6. 立花寺遺跡群 | 21. 麦野 C 遺跡 | 35. 此岡古墳群 | 50. 釜蓋原遺跡 | 65. 原ノ畑遺跡 | 78. 立石遺跡 |
| 7. 金剛山古墳群 | 22. 雑餉隈遺跡群 | 36. 薬師の森遺跡 | 51. 汐井川遺跡 | 66. 後原遺跡 | 79. 先ノ原・春日公園内遺跡 |
| 8. 七曲古墳群 | 大野城市 | 37. 松葉園遺跡 | 52. 中ノ原遺跡 | 太宰府市 | |
| 9. 持田ヶ浦古墳群 A 群 | 23. 御陵脇遺跡 | 38. 森園遺跡 | 53. 金ヶ浦遺跡 | 67. 成屋形遺跡群 | |
| 10. 持田ヶ浦古墳群 B 群 | 24. 塚口遺跡 | 39. 中・寺尾遺跡 | 54. 笹原古墳 | 68. 成屋形古墳 | |
| 11. 持田ヶ浦古墳群 C 群 | 25. 御陵遺跡 | 40. ヒケシマ遺跡 | 55. 仲島本間尺遺跡 | 69. 裏ノ田窯跡 | |
| 12. 持田ヶ浦古墳群 D 群 | 26. 御陵前ノ椽遺跡 | 41. 榎町遺跡 | 56. 仲島遺跡 | 70. 裏ノ田古墳 | |

第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ. 調査成果

1. 調査の概要

調査地は、乙金山から北西に派生する標高100～156mの丘陵頂部から東側斜面にあたり、大野城市大字乙金1121番1に所在する。調査面積は約1,000㎡である。調査前の土地利用は、杉を主体とする山林であった。踏査の結果、同一の尾根線上に3基の古墳が確認されており、今回の調査では2基を対象とした。その他の遺構についても作業員と重機によるトレンチ調査を実施し、検出に努めたが確認できなかった。



第3図 1号墳現況測量図 (1/100)

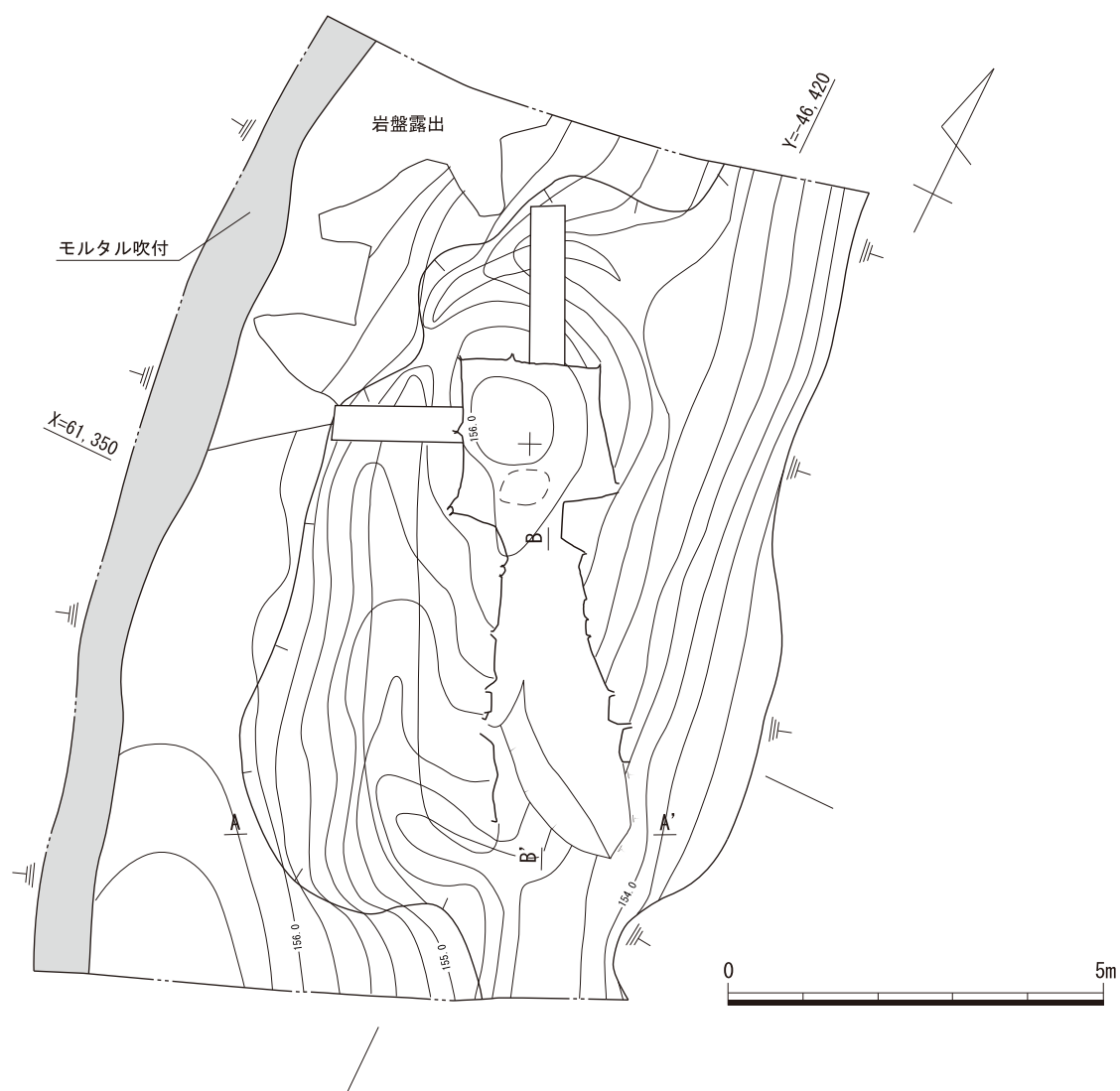
2. 遺構と遺物

1号墳

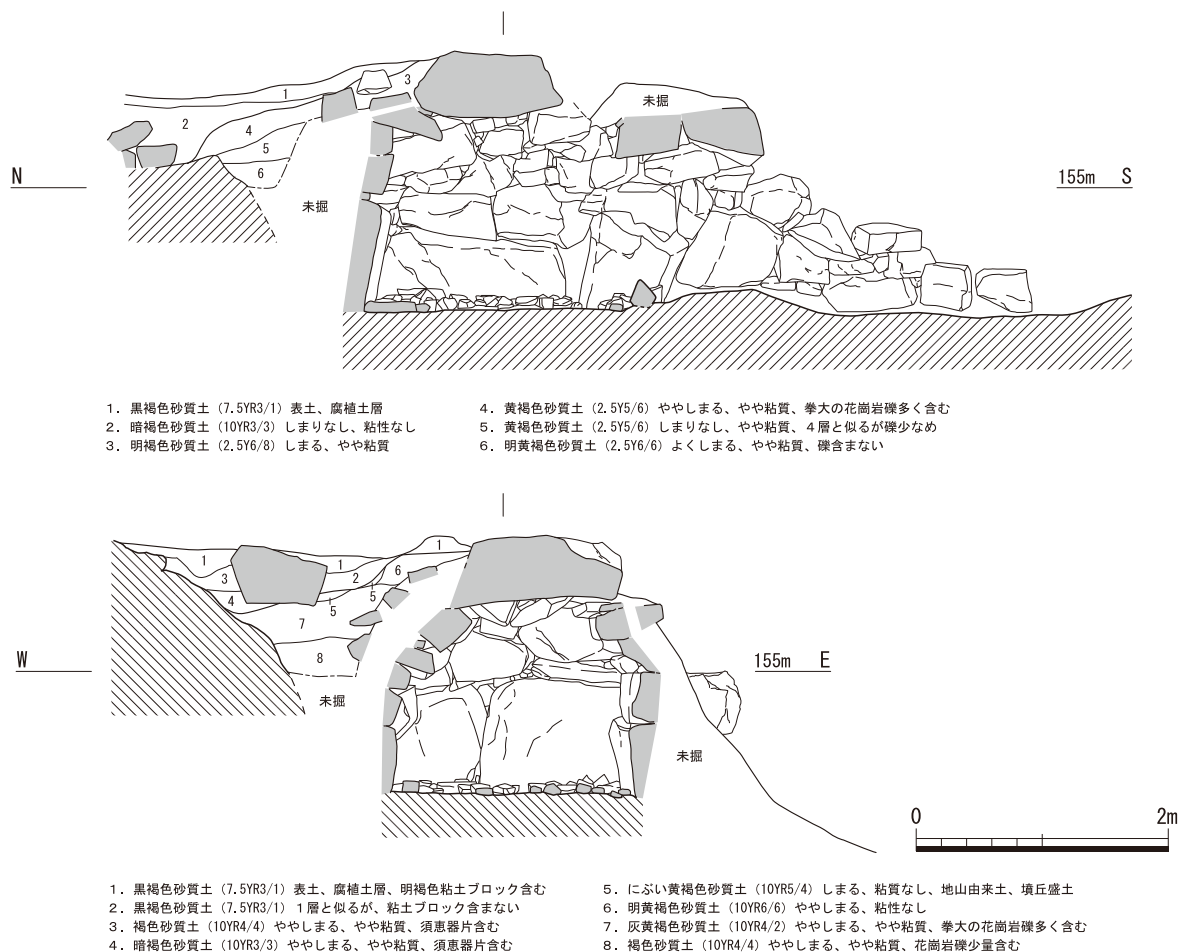
1) 古墳の位置と現況（第3図、図版2）

標高154～156m、北西方向へ延びる尾根付近に単独で立地する。尾根の頂部から西側にかけての斜面は、モルタルの吹き付けによる法面養生が完了しており、旧状を留めていない。対象地一帯は花崗岩風化土壌が地山となるが、古墳の北側では花崗岩の岩盤が未風化のまま露出していた。

1号墳は、尾根の頂部からやや外れた東側の斜面に位置している。当斜面はかなりの急傾斜で、標高154m付近から法面が大きく崩落しており、古墳築造時に比べて尾根・斜面ともにやせているものとみられる。そのため、墳丘は大きく流出しており、玄室の天井石や壁面の石積み、羨道側壁とみられる石材がすでに露出していた。また、玄室天井石が玄室内へとずれ込んでいる状況も認められ、崩壊が進んでいるものと推測された。現状では墳丘の高まりは顕著でなく、墳裾と想定されるわずかな傾斜の変化点を確認されるのみであった。



第4図 1号墳墳丘遺存状況図 (1/100)



第5図 1号墳墳丘土層図 (1/60)

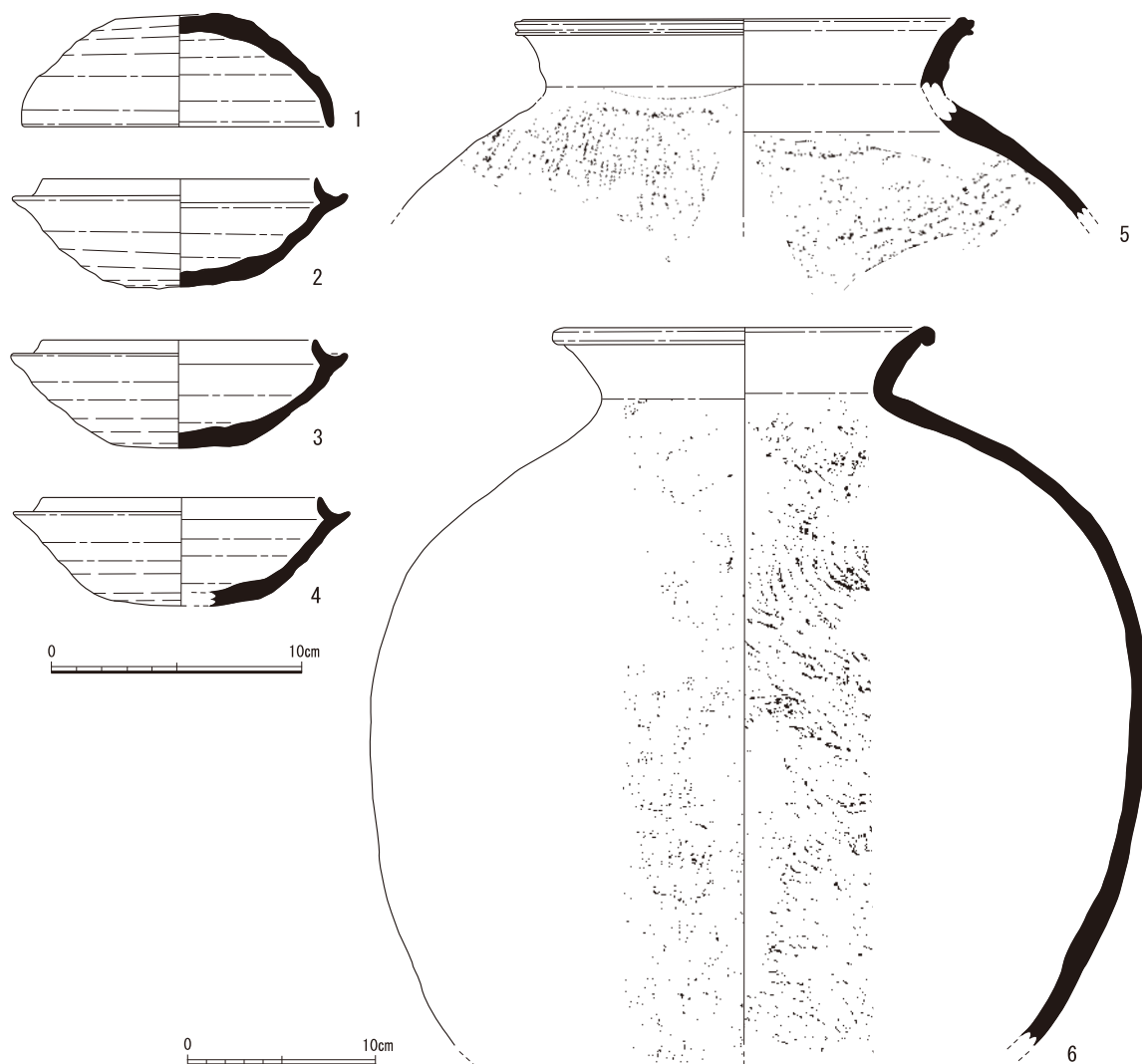
2) 墳丘 (第4・5図、図版2・3)

先述のとおり墳丘の残りは悪く、頂部から東側斜面にかけてはほとんど残存していない。そのため、墳丘が残存するとみられる北側と西側にトレンチを設定し、その結果に基づいて墳丘遺存面まで掘り下げた。さらに盛土を除去し、石室掘方も確認する予定であったが、石室が危険な状況であったことから、掘方底面までの掘り下げは断念した。以下の記述における墳丘および石室の各部名称は、例言に示した凡例に従う。

まず東西の規模だが、墳丘西側は玄室中軸から西側の墳裾（周溝下端部）まで1.1mを測る。一方、墳丘東側は盛土が大きく流出しているため、正確には分からない。築造時の墳丘は、現在露出している玄室側壁の石材を覆っていたとみられることから、少なくとも玄室中軸から東側へ2.0mまでは盛土されていたと考えられる。これらの数値より、東西の規模は3.1m程度に復元できる。

次に南北の規模であるが、墳丘北側は玄室中軸から墳裾（周溝下端部）まで2.5mを測る。一方南側については、羨道左側壁南端まで盛土に覆われていたことから、玄室中軸から同石材までを計測すると5.0mである。これらの数値から、南北の規模は7.5mとなる。以上より、1号墳は東西3.1m、南北7.5mの楕円状に復元できる。

周溝は、墳丘の西側から北側にかけてめぐる。底面の標高は、南端部で154.8m、北端部で155.6mと次第に高くなっており、スロープ状を呈していたものとみられる。



第6図 1号墳周溝出土遺物実測図（5・6は1/4、他は1/3）

地山整形 丘陵の東側斜面をL字状に造成して平坦面をつくり、墳丘基底面とする。石室掘方は未掘のため、全くの不明である。

盛土 石室の構築と連動して盛土を行っている。整形された地山と石室石材の間に生じた空間を埋めるように盛土しており、これらの単位は20～30cmほどと総じて厚い。これらは墳丘盛土というよりは、石室裏込土と表現するのが適当であろう。裏込土は花崗岩礫を多分に含むことから、地山整形時の廃土とみられる。

I区周溝出土遺物（第6図、図版11）

須恵器（1～6） いずれも周溝埋土から出土したもので、原位置を保っているものは無い。墳丘祭祀に用いられ、周溝内へ転落したものとみられる。

1は杯H蓋。天井部は回転ヘラケズリが施され、丸みを帯びる。2～4は杯H身で、立ち上がりは短く内傾する。底部は回転ヘラケズリされる。5・6は甕である。5は口縁端部が三叉状をなす。胴部外面には平行タタキ、内面には同心円文当具痕跡が認められる。口縁部と胴部は接合しないものの、色調や胎土から同一個体として図示した。6は5に比べて頸部がしまり、口縁端部は玉縁状に肥厚する。胴部は外面に擬格子タタキ、内面に同心円文当具痕が残る。

3) 主体部（第7図、図版4～6）

主軸をN-25°-Wにとり、南東に向かって開口する単室両袖式の横穴式石室である。主軸上の全長は6.1mを測る。石室は、羨道の天井石および側壁上位の石材を失うものの、玄室はほぼ完存する。玄室床面は後世に改変を受け遺物の残存状況は良くないが、羨道で土器がまとまって出土した。

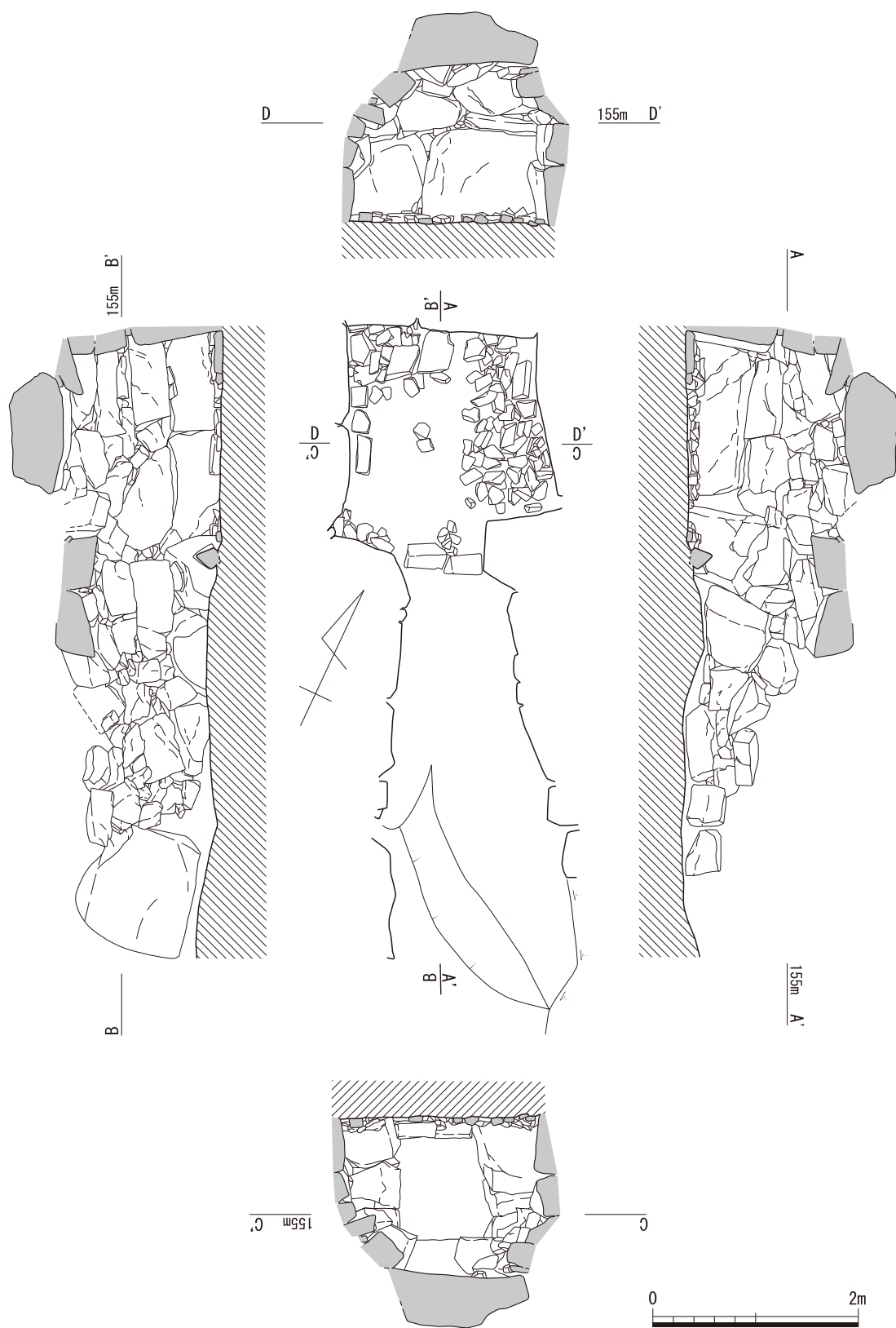
本来であれば玄室床面の検出後に石室主軸を決定し、それに従い土層等の記録類を作成すべきだが、羨道の閉塞石が良好に残存する上、羨道右側壁の石材が羨道内へとずれ込み、玄門付近を覆っていたことから、玄室内への進入が困難であった。そのため、石室主軸設定前の羨道土層図・周溝土層図・閉塞石縦断図については、任意の主軸を用いて記録した。任意の主軸を用いた場合は、実測図に付記している。また、石室の部分名称については、例言に示した凡例のとおりとし、左右は羨道から玄室を見た場合の左右とする。

玄室 平面形は方形に近いが、玄門右袖石が玄室側へと張り出していることから、ややいびつな形態をなす。これは、左右側壁の長さの違いとも換言でき、左側壁が2.0m、右側壁が1.7mと、右側壁のほうが短い。また、奥壁側・玄門側の幅は、それぞれ1.85m・2.2mを測り、玄門側に向ってわずかに幅広となる。床面から天井石までの高さは、最大で1.6mを測る。

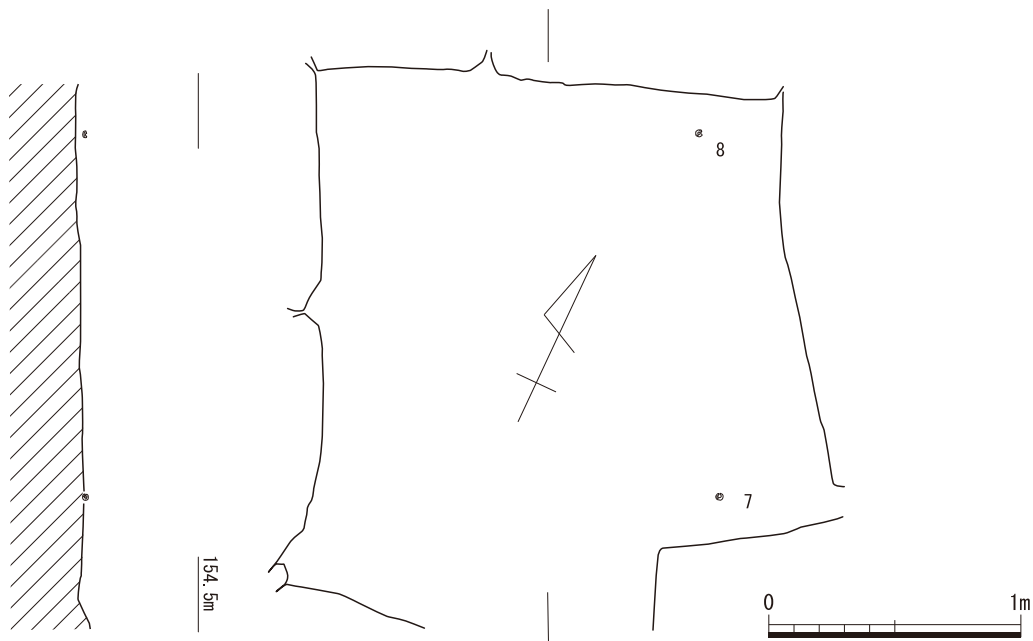
奥壁基底部は2石で、右側壁側に長方形の大型石材を配し、左側壁側に方形の石材を据える。これら石材は玄室側に向かってやや内傾しており、上面は標高154.9mでそろそろ。基底石の上位は横目地が明確でなく、不定形の塊石や扁平な石材を用い、左右側壁側から石室主軸側へと傾斜をつけながら積み上げる。また、基底石の上位から約80°で持ち送られている。なお、右側壁側の基底石から数えて3つ目の大型石材は、右側壁へと架け渡されており、隅角消しの役割を果たしている。一方左側壁側には隅角消しの石材は認められず、左側壁に用いられた石材は奥壁側の石室外までのびており、奥壁石材をおさえているとみられる。

右側壁は基底部に長方形の大型石材を横位に1石配する。2段目は大型の石材を2石据え、上面を154.9mでそろえる。3段目以降は大小の方形石材を用いながら水平方向に積み上げており、玄門側に接する石材はいずれも隅角消しの役割を果たす。基底石の上位から、約70°で持ち送られている。一方左側壁は基底部に大型の方形長方形石材2石を横位に据える。奥壁側は長方形石材を縦位に積み、前壁側は不定形の大型塊石の間を小型の石材で充填しながら積み上げる。また、玄門側の基底石から数えて3つ目の石材から隅角消しの処理が行われている。持ち送りは、基底石の上位から約50°で行われている。なお、玄門側天井石付近の石積みは玄室内部へとはらみ、築造時の状態を保っていない。

玄門は、両袖ともに石材を多段積みすることで形成されている。いずれも基底部に高さのある大型の方形石材を据え、その上位に塊石を2段積みしており、最後に楣石を架構する。当該石材は羨道の天井石も兼ねている。両袖石の間には方形石材を2石据え、楣石とする。玄門の高さは1.0m、幅0.8mである。玄室天井石は2石用い、奥壁側の石材はかなり大型で、天井のほとんどを覆う。玄門側に配されたもう一石は、玄室左側壁のはらみにともない玄室内へずれ込んでおり、原位置を留めていなかったため、図示していない。玄室床面には扁平な石材が敷かれるものの、中央から左側壁にかけては後世の改変を受け、遺存していなかった。



第7図 1号墳石室実測図 (1/60)



第8図 1号墳玄室遺物出土状況 (1/30)

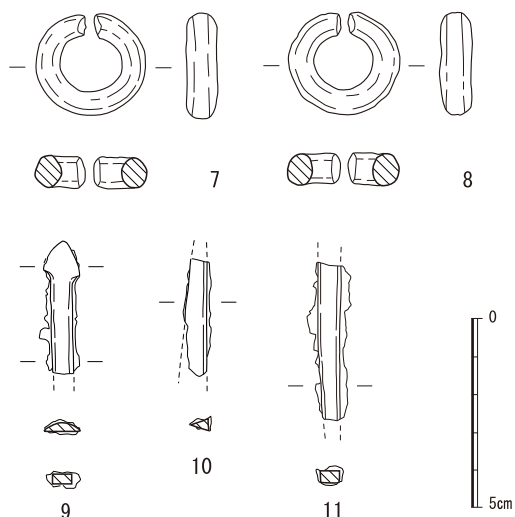
遺物出土状況 (第8図) 先述のとおり、床面は後世の改変を受けており、遺物の残存状況は悪い。床面精査時に右側壁側で耳環が2点出土したが、原位置は保っていないものとみられる。埋土はふるいがけを行い、鉄鏃片3点を回収した。

玄室出土遺物 (第9図、図版11)

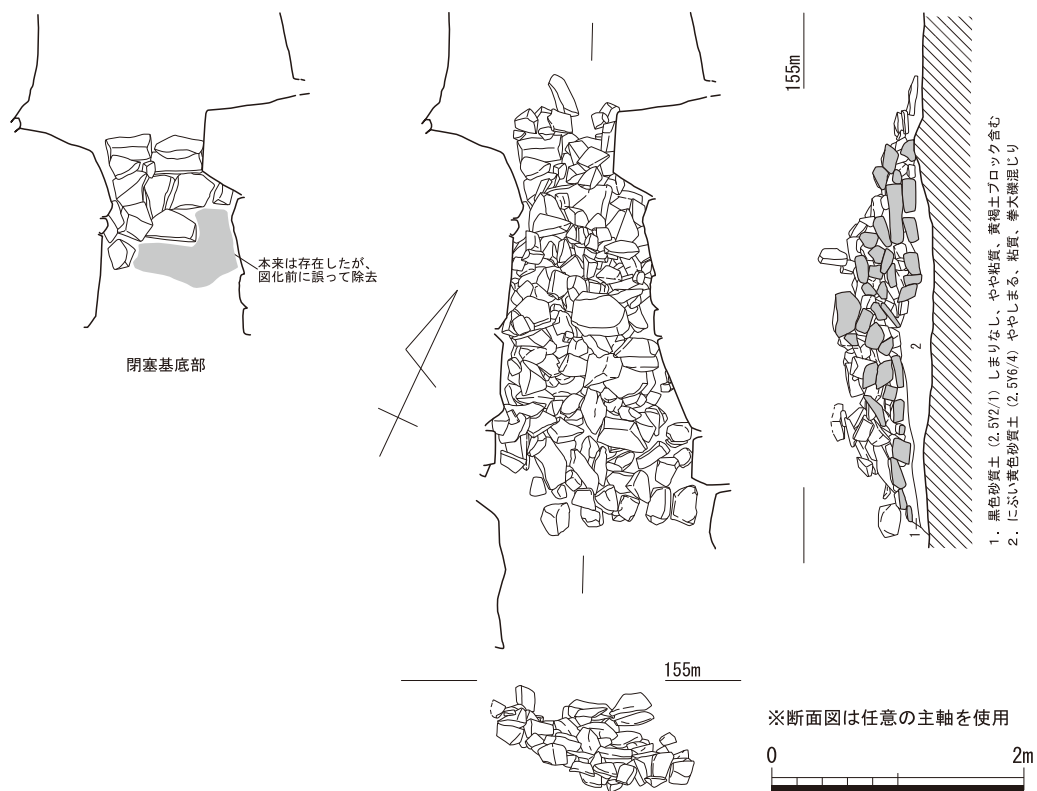
銅製品 (7・8) 7・8は銅芯金箔貼耳環である。表面はやや白っぽい金色を呈すものの、その多くは緑色の錆に覆われる。開口面には箔を折り込んだシワが認められる。7は外径3.0cm・銅芯径0.8cmを測る。8は外径2.95cm・銅芯径0.8cmを測る。これらは、形態・法量ともに類似することから、セットをなすものとみられる。

鉄製品 (9～11) 9～11は鉄鏃片で、いずれも長頸鏃である。9は刃部から頸部にかけて残存する。刃部は片丸造である。10は片刃鏃の刃部片。11は頸部片とみられ、断面長方形をなす。

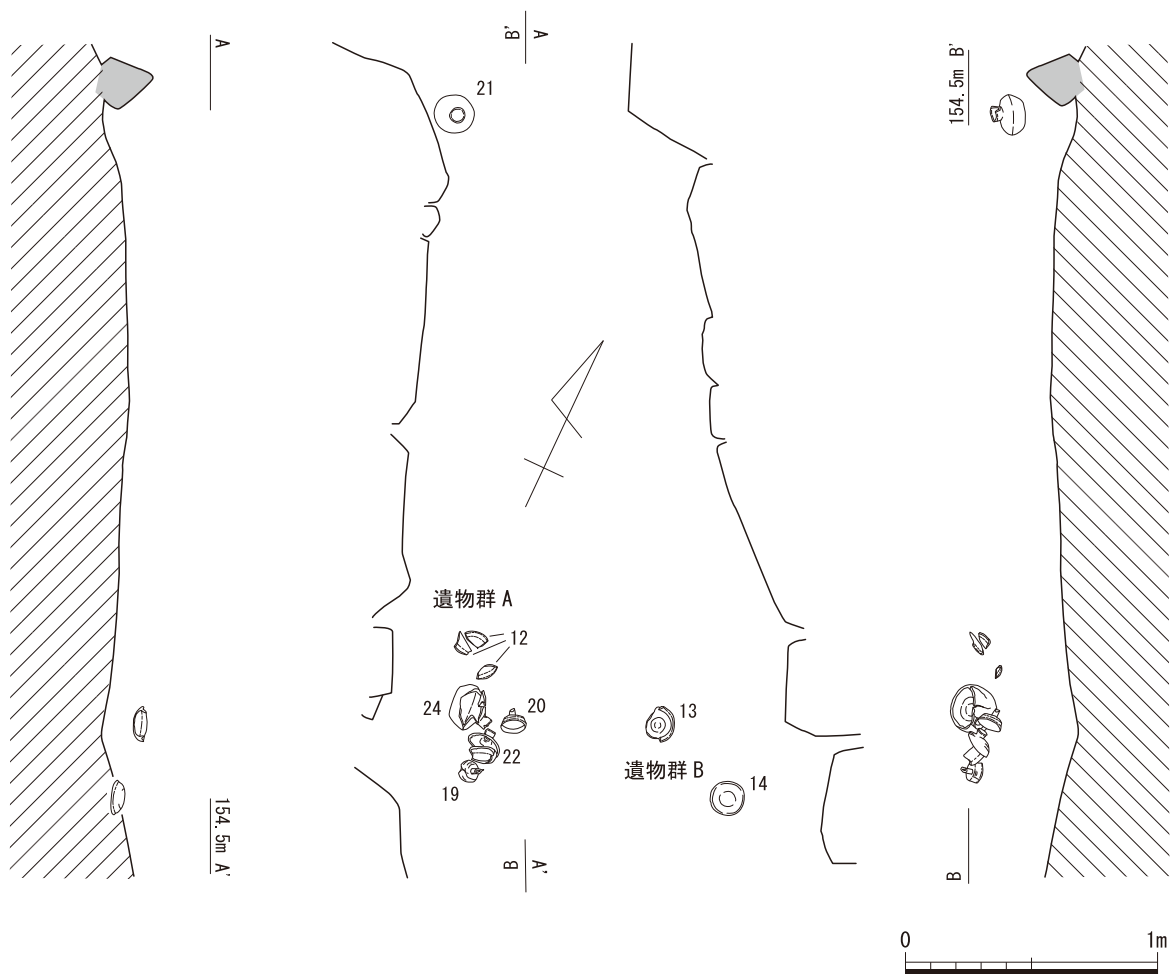
羨道 羨道は、玄門廻石から羨道南端の石材までと捉えた場合、3.8mを測る。側壁の長さは左右で異なり、左側壁が3.8m、右側壁3.0mである。左側壁の基底部石材は、南北主軸に対して概ね平行する。基底部に比較的大型の石材を用い、玄室側には方形石材を積み上げる。一方、羨道側の上位には小・中型の不定形石材を積み上げる。なお、羨道南端部には幅1.2m、高さ1.2mを測る大型の方形石材が1石据えられている。一方、右側壁の基底部石材は南端部に向かって開いており、南北主軸とは平行しない。基底部には比較的大型



第9図 1号墳玄室出土遺物実測図 (1/2)



第 10 図 1 号墳閉塞石実測図 (1/60)



第 11 図 1 号墳羨道遺物出土状況 (1/30)

の石材を据え、その上位には中型の塊石を積み上げる。なお、右側壁は南端部に向かって石材を減じるが、羨道内にも側壁石材が複数転落していたことから、現状よりも石積みは高かったとみられる。天井石は玄門楣石を兼ねる石材を含め、2石用いられているが、羨道内に大型石材が転落しており、あと1石程度存在した可能性も残る。幅は玄門部で0.8m、羨道の南端部で1.7mを測り、南に向かって幅広となる。

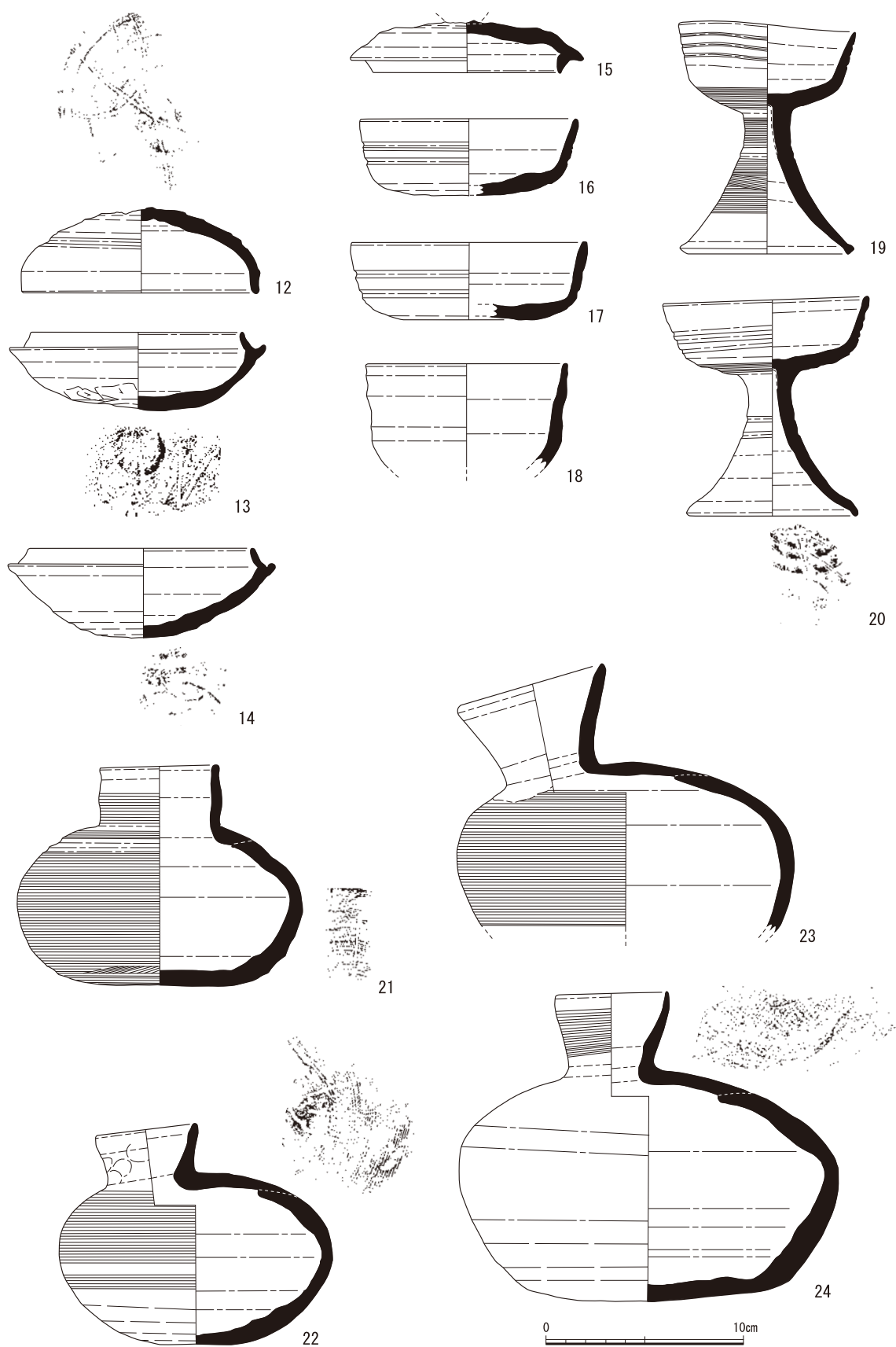
閉塞施設（第10図、図版8） 玄室中軸から南側0.5～4.1mの範囲に閉塞石が分布する。石材は隙間無く積まれ、間層が認められないことから、概ね最終閉塞時の状況を留めているものと判断した。石材は山なりに積み上げられ、玄室中軸から2.4mの地点にピークが認められる。このピークは、現状の羨道天井石南端部分よりもさらに南側にあることから、先述のとおり天井石があと1石存在した可能性は高い。天井石との間には50cm程の隙間があり、羨道を完全に閉塞するには至っていない。石材は大小用いられるが、相対的にこぶし大から人頭大のものが多く、基底部には大型の石材を配していた。なお、閉塞石除去後も小礫が認められることから全体に検出を行ったが、散在的なあり方を示すことから、閉塞石の一部ではなく羨道床面の整地土に含まれるものと判断した。

遺物出土状況（第11図、図版7） 遺物はいずれも須恵器で、閉塞石の上位と下位から出土した。前者は、玄室中軸から3.3～3.9m、閉塞石南端部の左側壁付近でまとまって出土した（遺物群A）。須恵器杯H蓋、高杯、平瓶からなる。閉塞石を除去した後、玄室中心から3.6～4.0mの右側壁付近で須恵器杯H身が2点出土したほか（遺物群B）、玄門付近の左側壁沿いに直口壺が単独で出土した。その他の須恵器は、閉塞石を覆う埋土から破片の状態で出土した。これらは、羨道にともなうものか、墳丘祭祀で使用されたものが流れ込んだのか、不明である。

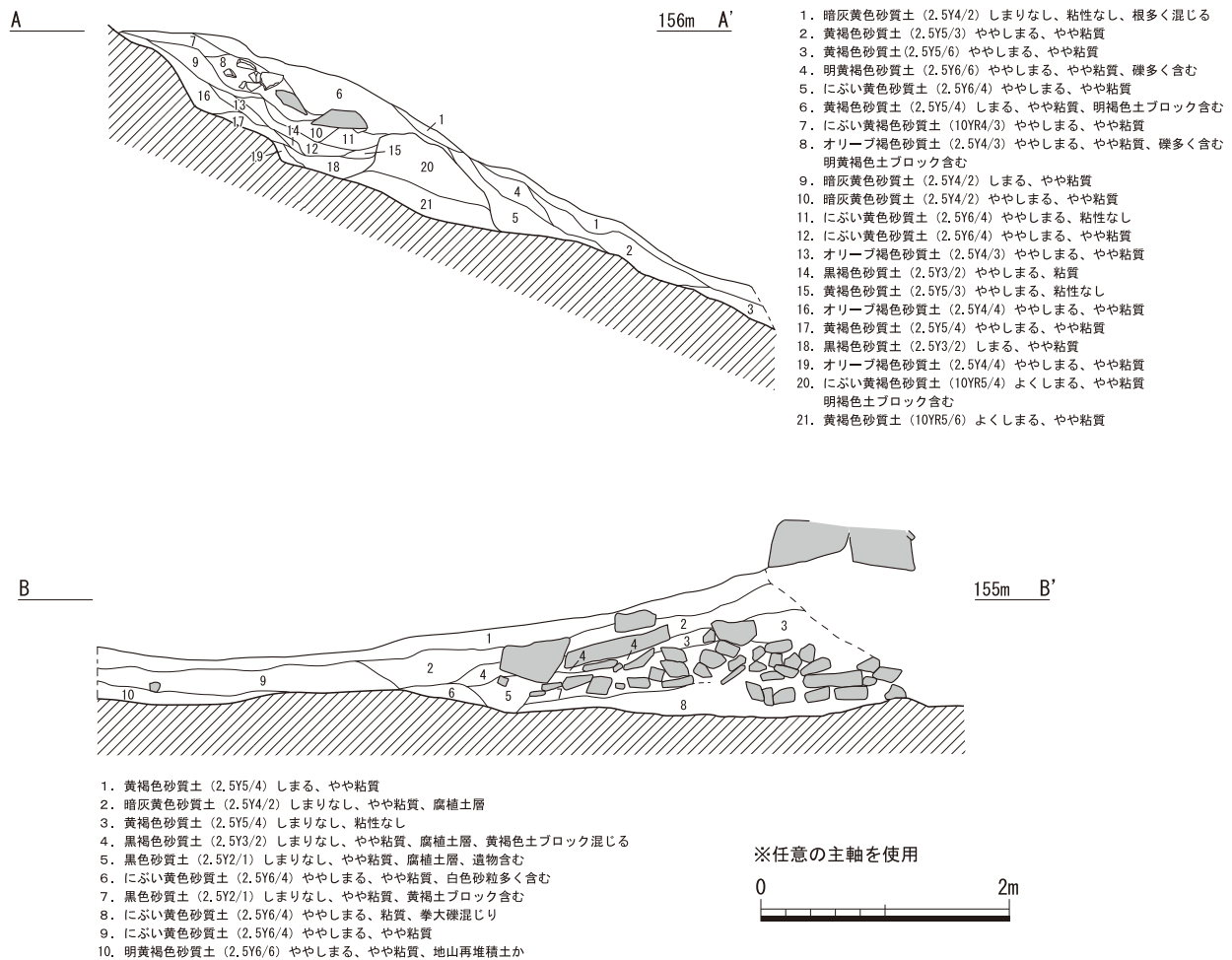
羨道出土遺物（第12図、図版11・12）

須恵器（12～24） 12～14は杯Hである。12は蓋で、天井部は回転ヘラケズリされる。天井部外面にヘラ記号が施される。13・14は身で、立ち上がりは短く、内傾する。底部は13が静止ヘラケズリ、14が回転ヘラケズリされる。いずれも外面にヘラ記号が施される。また、いずれも褐色を呈し、還元焼成に至っていない。15～17は杯Gである。15は蓋で、器高は低く扁平で端部にかえりがつく。天井部は回転ヘラケズリされ、つまみの剥離痕が残る。受け部には、身の口縁部とみられる小片が付着し、蓋・身セットでの焼成が想定できる。16・17は身である。いずれも体部は直線的にのび、体部と底部の境は丸みを帯びる。体部外面には2条の沈線がめぐり、底部は回転ヘラケズリされる。18は小片のため器種は不明確だが、杯Gよりも深身の椀と推測できる。内外面ともに回転ナデ調整。

19・20は無蓋高杯。19は深みのある杯部をなし、外面には3条の沈線がめぐり、脚部はハの字状に開き、端部は方形を呈する。杯部下半から脚部にかけてカキメが施される。20は19に比べて浅い杯部で、杯G身と形態的に類似する。体部には2条の沈線がめぐり、底部にはカキメが施される。脚部はハの字状に開き、端部は下方へと屈曲する。脚部外面には2条の沈線がめぐり、脚部内面にヘラ記号が認められる。21は直口壺。胴部中央に最大径があり、口縁部は垂直にのびる。回転ナデ調整を基本とし、胴部下半のみ回転ヘラケズリされる。口縁部下半から胴部、底部にかけてはカキメが施される。胴部下半には20と同一文様のヘラ記号が刻まれている。ほぼ完形だが、口縁部には



第 12 図 1 号墳羨道出土遺物実測図 (1/3)



第 13 図 1 号墳周溝・羨道土層図 (1/60)

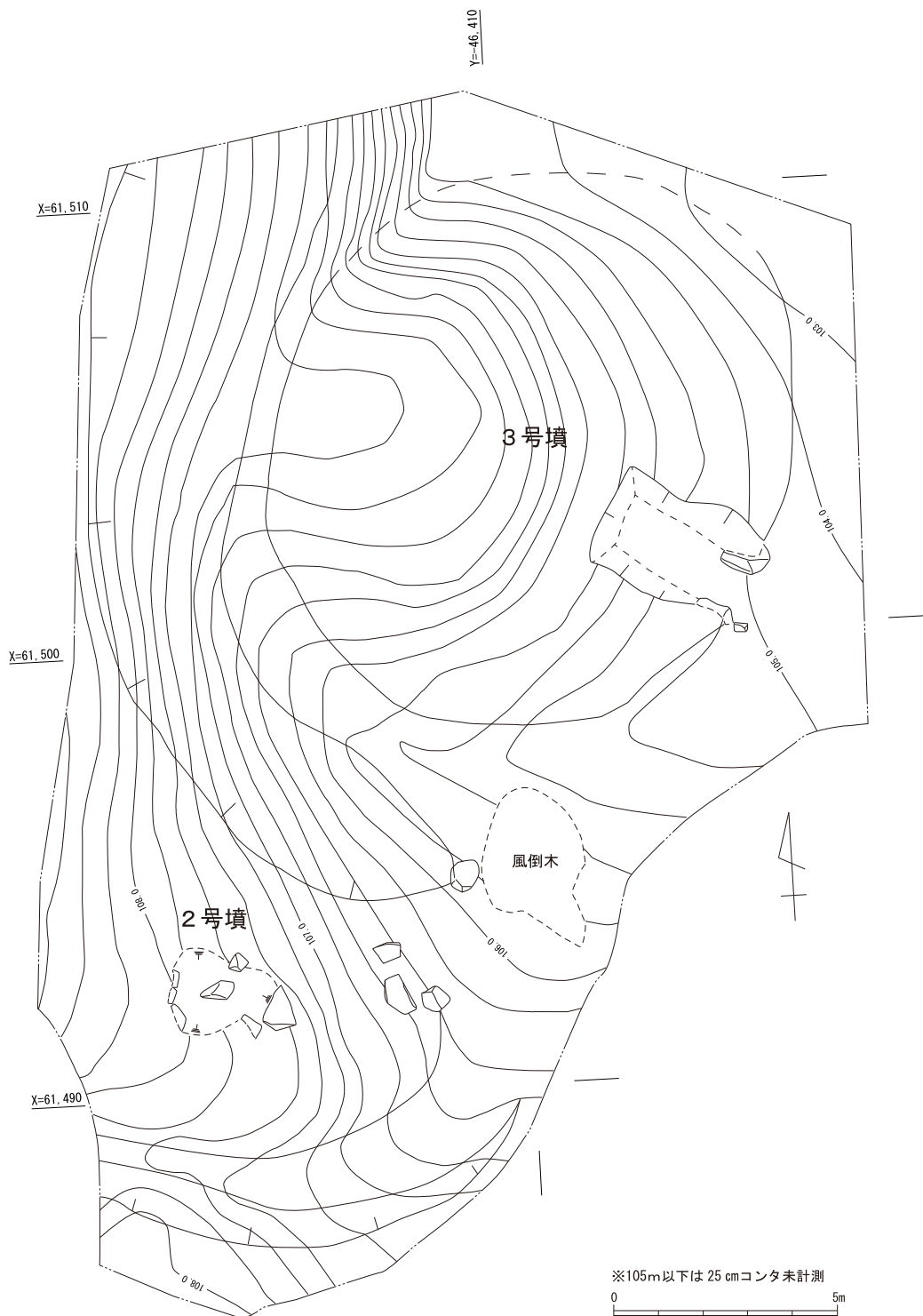
打ち欠きが認められる。22～24は平瓶で、大小2つの法量が認められる。22は小型のもの。器体は風船技法を用いて成形され、内面には円盤閉塞の痕跡が残る。胴部下半は回転ヘラケズリされ、胴部上半にカキメが施される。胴部上半にヘラ記号が認められる。23は底部を欠く。風船技法により器体を成形した後、口縁部を接合する。胴部全体にカキメがめぐる。口縁部はハの字状に大きく開く。24は円盤閉塞時、円盤と胴部の境をタタキ成形しており、格子状のタタキ痕跡がわずかに残る。胴部下半のみ回転ヘラケズリされる。口縁部は23に比べると小ぶりでやや内湾し、外面にはカキメがめぐる。

墓道 明確な墓道は検出されていない。東側の斜面はかなり急峻であることから、谷筋から斜面を登り、古墳へと至るのは困難である。おそらく2・3号墳から連なる尾根づたいに登り、1号墳の北側へと至り、東側裾部を通り羨道へと至ったと考えられる。

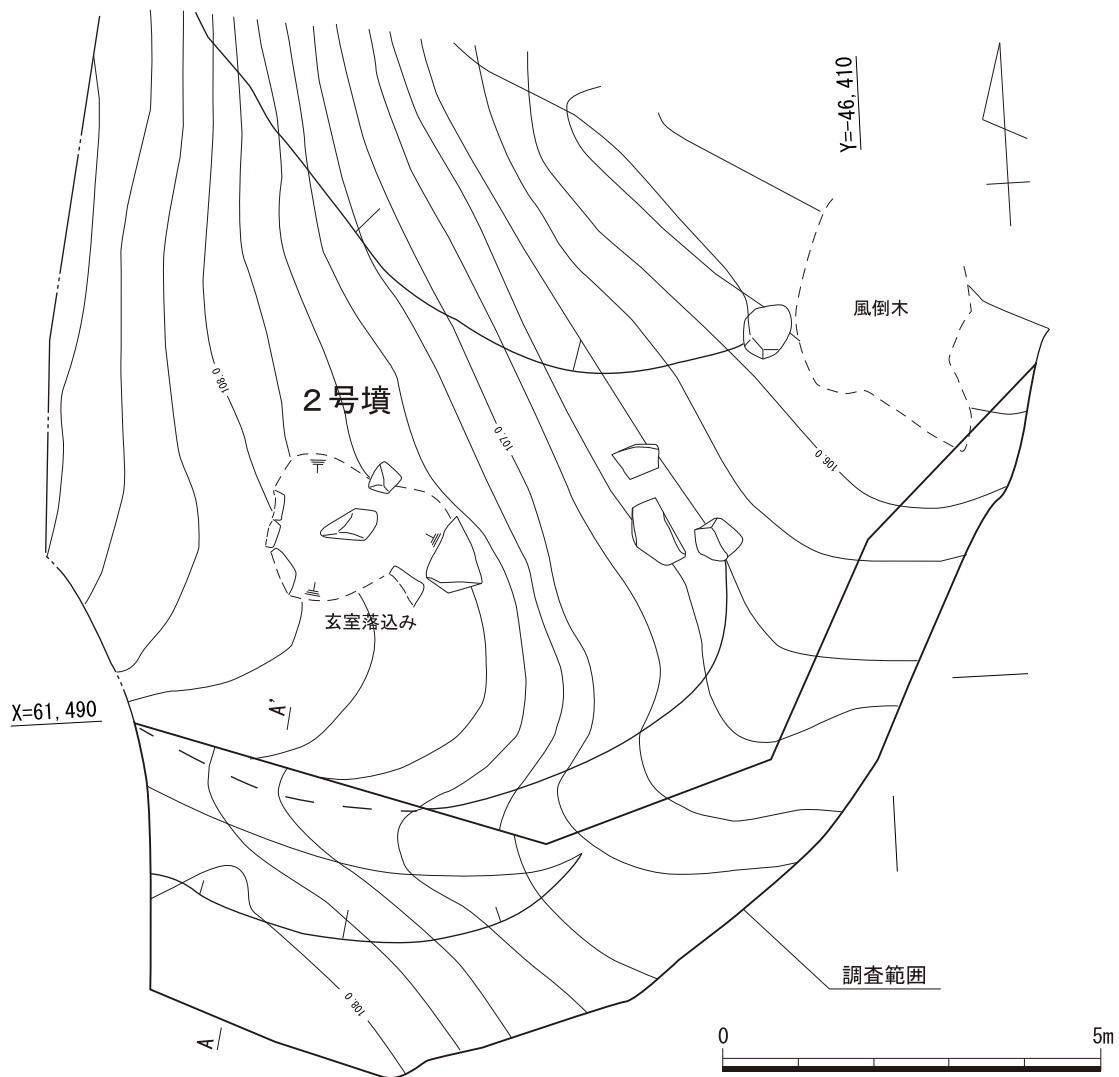
2号墳

1) 古墳の位置と現況 (第14図、図版8・9)

標高106～110m、北西方向へ延びる尾根からやや外れた東側の斜面に位置している。調査前から墳丘の高まりや周溝、石室の落ち込みが確認でき、横穴式石室を主体部とする古墳であることが想定できた。2号墳の北側には3号墳が接している。なお、墳丘の東側には平坦地が広がり、2m



第14図 2・3号墳現況測量図 (1/150)

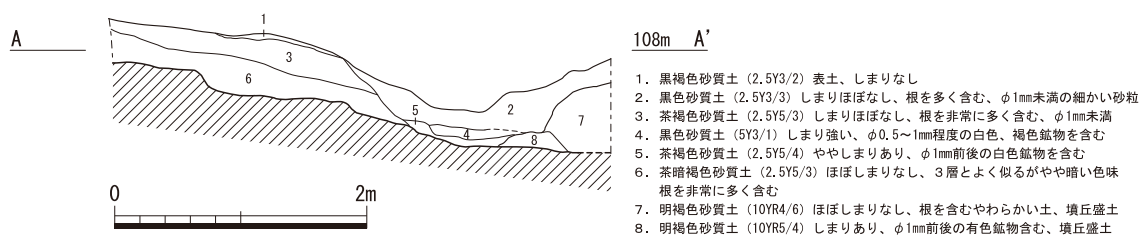


第 15 図 2号墳調査後測量図 (1/100)

を超える花崗岩の巨石が点在していた。この平坦地は重機による表土除去後、作業員による遺構検出を実施したが、遺構は確認できなかった。

2) 墳丘 (第15・16図、図版9)

石室石材が露出していることから分かるように、墳丘遺存状況は良好ではない。今回の調査では南側の墳裾を確認するに留まった。現在確認している玄室落ち込みの中央から南側の墳裾までを計測すると、約4mを測る。一方北側については、墳丘盛土が流出しているため、墳裾は明確でない。現況では円墳とみられることから、南側にも同程度盛土されていたと仮定すると、南北の規模は8m前後と考えられる。一方東西の規模だが、墳丘東側の羨道石材が集中する部分において墳裾とみられる傾斜変化点を確認できるため、ここから玄室落ち込みの中央までを計測すると約4.5mを測る。墳丘東側にあたる丘陵頂部から西側斜面にかけては、モルタルの吹き付けによる法面養生が行われ、旧状は失われている。そのため、墳裾や周溝の痕跡は確認できない。東側と同程度の墳丘規模と仮定するならば、西側も4.5m程度となり、東西規模は9m前後と考えられる。以上を踏



第 16 図 2号墳周溝土層図 (1/60)

まえると、2号墳は東西9m前後、南北8m前後の円墳に復元できる。周溝は南から西側にかけてめぐっていたと考えられるが、先述のとおり墳丘西側は大きく改変を受けており、全様は不明である。墳丘裾部の一部断ち割りを行った結果、盛土には地山に由来する褐色系の花崗岩風化土が使用されていた。

3) 主体部

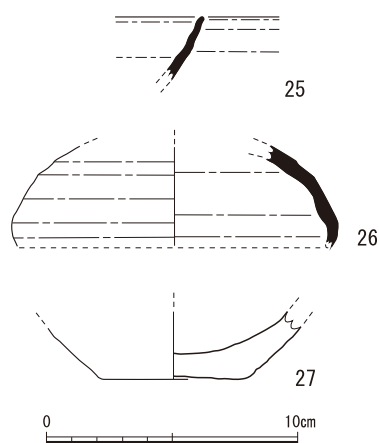
主体部は調査対象外であるため、発掘調査は実施していない。現況では、玄室とみられる部分の落ち込みや羨道石材が露出している。推定玄室部分は幅2.0m、長さ2.5mのいびつな長方形の落ち込みとなっている。天井石は遺存しておらず、玄室の側壁上位の石積みが露出している状況であった。玄室内には土砂が流入しており、内部の様相は明らかでない。玄室部分の落ち込みから北東側2mの地点に大型の石材が複数露出していた。これらは原位置か否かは明らかでないが、羨道を構成する石材の一部とみられる。玄室および羨道の位置から判断して、2号墳は北東側へ開口する横穴式石室と想定できる。

2号墳出土遺物 (第17図)

遺物は周溝埋土から出土した。出土量は少なく、いずれも小片であった。

須恵器 (25・26) 25は、器種不明の小片である。器壁は薄く、端部に向かって内湾気味にのびる。内面に降灰が認められる。26は杯H蓋である。天井部を欠くため、ケズリの有無は確認できない。全体に丸みを帯びた器形で、口縁端部は内側へやや巻き込む。

縄文土器 (27) 縄文土器の底部片とみられるが、内外面ともに調整は明瞭でなく、判然としない。底面は平らで、器壁は内湾気味に立ち上がる。



第 17 図 2号墳出土遺物実測図 (1/3)

3号墳

1) 古墳の位置と現況 (第14図、図版10)

標高103~110mに位置し、2号墳の北側に位置する。横穴式石室を主体部とする円墳である。2号墳との位置関係を示すため、現況測量のみ実施した。墳丘は良好に残存しており、現状で東西11.5m、南北13.0mを測る。周溝は墳丘南側から西側にかけて三日月状にめぐる。主体部は単室両袖式の横穴式石室で、南東方向へ開口する。石室は開口状態にあり、羨道部には土砂が流入するものの、玄室内への出入りが可能である。

IV. 総 括

1. 調査の成果

今回の調査は、2基の古墳を対象とした。ここでは調査の成果についてまとめ、古墳の時期的位置づけを行う。

(1) 1号墳

墳丘と石室の構造 横穴式石室を主体部とする円墳である。墳丘は流出が著しく、想定域をでないが、東西約3.1m、南北7.5mの楕円状に復元できる(第18図)。楕円形をなす理由は、地形的制約を受けた結果であり、急峻な斜面に立地することから、正円形に盛土するだけの十分な平坦地が確保できなかったためとみられる。主体部は単室両袖式の横穴式石室であり、南東方向に開口する。全長6.1mを測り、玄室平面は方形をなす。

土井基司氏は福岡平野における群集墳の横穴式石室の検討をとおして、次のような変化の方向性を指摘した(土井1992)。

- ①玄室平面の方形化、②玄室高・前壁高の減少、③腰石の退化・石積み目の粗雑化。こうした変化に基づき1号墳を検討すると、

①方形化の指標である玄室比(註1)は0.9と方形に近い数値を示す。

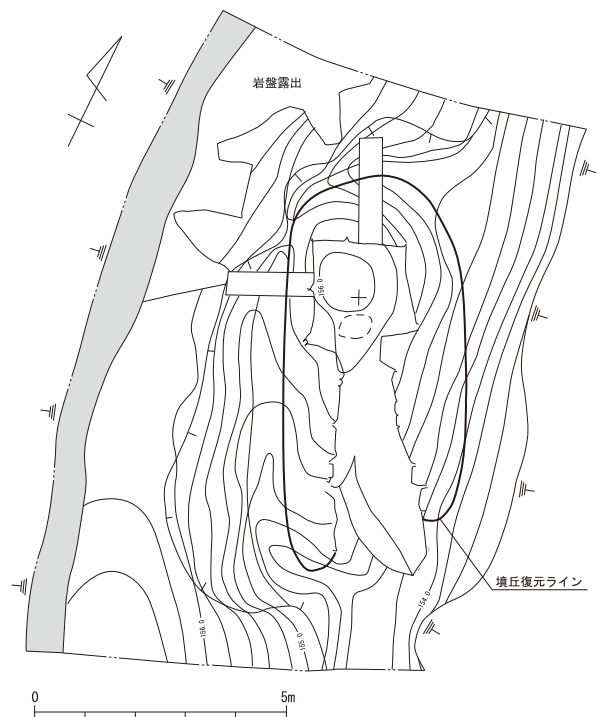
②玄室高減少の指標となる前壁比(註2)の数値は0.4を示し、玄室高が最も低くなった段階である。

③玄室腰石は他の石材に比べて大きいものを使用する。その他の石材は不定形のものが多く、石積み目の目地は不明瞭であることから、粗雑な印象を受ける。

これらの要素を踏まえると、土井分類の単4型式に最も類似する。本型式は7世紀第一四半期前後に位置づけられている。

出土遺物 玄室からは耳環・鉄鏃、周溝や羨道からは須恵器が出土した。ここでは羨道出土須恵器の時期について検討する。羨道出土須恵器は、閉塞石の上位と下位に大別できる。閉塞石上位からは、杯H蓋や無蓋高杯、平瓶がまとまって出土した(遺物群A)。杯H蓋は口径12cmで、天井部は回転ヘラケズリされ丸みを帯びる。無蓋高杯は脚部に透かしがなく、短脚化の傾向が認められる。一方閉塞石下位からは、杯H身や直口壺が出土している。杯H身は、口径11cm台で、体部は丸みを帯び、立ち上がりは短く内傾する。底部は回転ヘラケズリもしくは静止ヘラケズリ調整されている。

以上の特徴を牛頸窯跡群の編年に照らすと、杯HはIVA期の様相に近く、閉塞石の上下で時



第18図 1号墳墳丘復元図(1/150)

期差は認め難い。一方で、高杯には短脚化や脚端部の処理の粗雑化といった次期（IVB期）の特徴も認められる。こうした点から、羨道出土須恵器は、IVA期のなかでも新相段階、もしくはIVB期への過渡期段階と表現でき、7世紀初頭頃の年代観を与えることができる。周溝出土の土器も同様の時期に位置づけられる。なお、閉塞石を覆う埋土からは杯Gも出土しており、IVB期まで祭祀等が行われた可能性がある。

築造時期 石室からみた時期は7世紀第一四半期頃であり、土器も7世紀初頭頃と相互に年代の大きな隔たりはないことから、1号墳は7世紀初頭頃の築造といえる。

（2）2号墳

墳丘と石室の構造 横穴式石室を主体部とする円墳である。墳丘は東西約9m、南北約8mに復元できる。主体部は未調査のため詳細は不明だが、石室石材の露出状況から、北東方向へ開口するとみられる。未調査の3号墳との先後関係は明らかでない。

築造時期 主体部は未調査であることから、時期的位置づけは出土遺物に頼るしかないが、時期の判明している遺物は周溝出土の杯H蓋のみである。本資料については、IVB期に比定できるため、2号墳には一応7世紀前半頃の年代観を与えることができる。

2. 古墳群の位置づけ

今回確認した3基の古墳は、巨視的にみれば同一の尾根線上に築造された一連の古墳群と評価できる。現状では、上唐山古墳群と呼称したい。

上唐山古墳群は7世紀前半に営まれており、周辺に群集墳が多数展開する時期と重なる。ただし、第19図に示すとおり当該期の群集墳は乙金山西麓に集中しており、北麓側に位置する古墳群は他に乙金北古墳群があるのみで、造墓は相対的に低調であったとみられる。西麓に展開する古墳群は、同時期に営まれた集落（薬師の森遺跡）との関係性が指摘されているが（上田2019）、北麓の古墳群も同様なのか、現状では明らかでない。

また、1号墳と2・3号墳はかなり離れており、単独で存在する点が特徴である。さらに、周辺の群集墳と比べても非常に高い標高に位置している。こうした点から、福岡平野や博多湾沿岸はもちろんのこと、糟屋方面の山々まで見渡すことができ、1号墳の築造に際してはこの眺望が意識されたものと考えられる。当該地の北側には、福岡平野と糟屋平野を結ぶ峠道（唐山峠）がのびており、古くから交通の要衝であったことを踏まえると、この景観は当時の人々にとっても象徴的なものであったとみられる。副葬品が乏しいため、1号墳の被葬者像の復元は難しいが、石室構造や墳丘規模からみると、特異な存在とは言い難い。今後他地域の事例と比較し、具体的な位置づけを行う必要があるだろう。

註

（1）玄室比＝（左側壁長＋右側壁長）／（奥壁幅＋前壁幅）

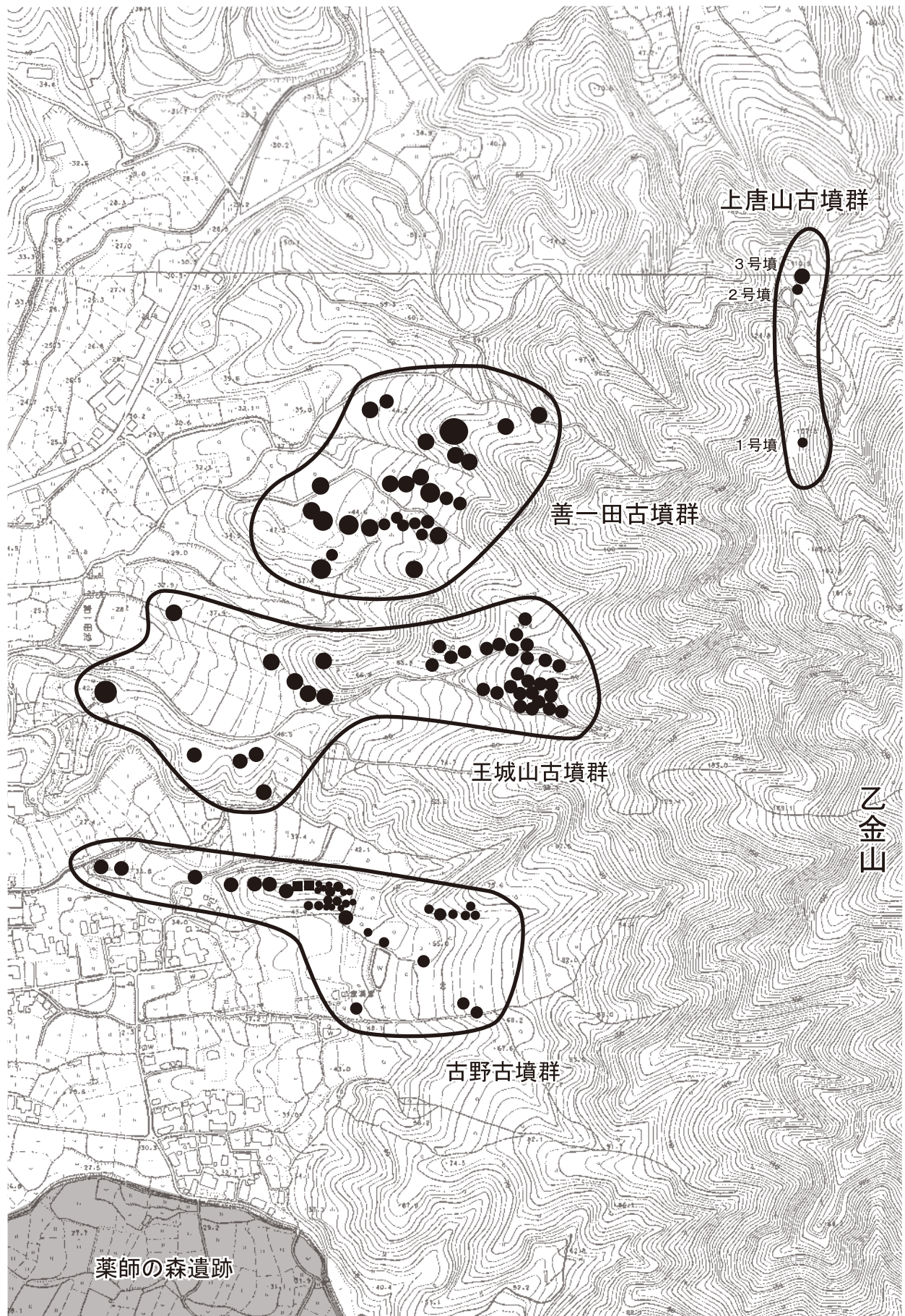
（2）前壁比＝前壁高／玄室下半高（＝玄室高－前壁高）

参考文献

上田龍児 2018「大宰府成立前夜における地域社会の変革」『大宰府の研究』大宰府史跡発掘50周年記念論文集 刊行会

上田龍児 2019「乙金古墳群の研究」『古文化談叢』第82集 九州古文化研究会

土井基司 1992「横穴式石室から見た群集墳の様相」『九州考古学』第67号 九州考古学会

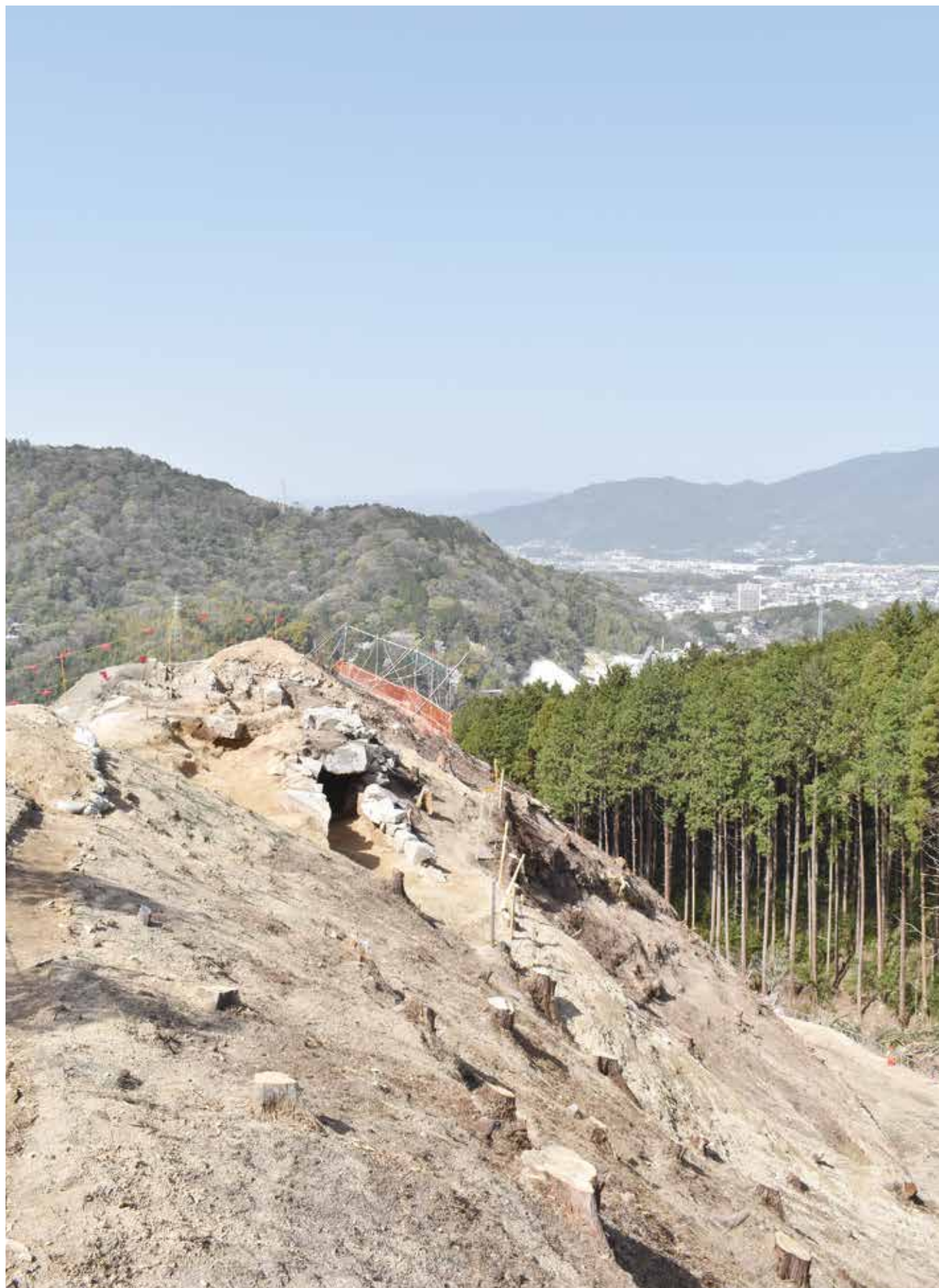


第 19 図 上唐山遺跡周辺の古墳分布 (1/5,000)

第1表 出土遺物観察表

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cmg) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)<残存値>	形態・技法・文様の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
1	須恵器	杯蓋	1号墳墳丘1区黒褐土	①12.45 ②4.5	外面：天井部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	A：微細～2mm程の白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：N4/ 灰色～2.5Y4/1 黄灰色	
2	須恵器	杯身	1号墳墳丘1区黒色土	①11.1 ②4.35 受部径13.35	外面：底部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	A：微細～3mm程の白色砂粒・長石・雲母を含む B：やや良好 C：N4/ 灰色～2.5Y7/3 浅黄色	
3	須恵器	杯身	1号墳墳丘1区黒色土	① (11.1) ②4.3 受部径13.4	外面：底部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	A：微細～1mm程の白色・黒色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内10Y4/1 灰色 外N7/ 灰白色～N4/ 灰色	
4	須恵器	杯身	1号墳墳丘1区黒色土	① (11.2) ②4.3 受部径13.4	外面：底部ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデ 内面：回転ナデ	A：微細～3mm程の白色・黒色砂粒・雲母を含む B：良好 C：N4/ 灰色～5Y5/1 灰色	
5	須恵器	甕	1号墳墳丘1区黄褐土	① (24.4) ② (10.6)	外面：口縁部回転ナデ、胴部擬格子タタキ 内面：口縁部回転ナデ、胴部内面同心円文 当て具痕	A：微細～2mm程の白色砂粒・長石・石英・ 雲母を含む B：良好 C：内10Y6/1 灰色 ～N3/ 暗灰色 外N6/ 灰色～5Y5/1 灰色	
6	須恵器	甕	1号墳墳丘1区周溝(黒褐土)	①20.3 ②38.1 ⑤41.4	外面：口縁部回転ナデ、胴部外面格子目 タタキ後カキメか 内面：口縁部回転ナデ、胴部内面同心円文 当て具痕	A：微細～3mm程の白色砂粒・長石を含む B：良好 C：N4/ 灰色～2.5Y6/1 黄灰色	
7	銅製品	耳環	1号墳玄室（前壁側）	外径3.0 内径1.6 厚さ0.8 重さ18.4 g			銅芯に金箔を 貼り付ける
8	銅製品	耳環	1号墳玄室（奥壁側）	外径2.95 内径1.55 厚さ0.8 重さ19.0 g			銅芯に金箔を 貼り付ける
9	鉄製品	鉄鏃	1号墳玄室フルイガケ	残存長4.2 鐵身部幅1.0 頸部幅0.6 重さ2.4 g			
10	鉄製品	鉄鏃	1号墳玄室フルイガケ	残存長3.0 最大幅0.6 重さ1.6 g			
11	鉄製品	鉄鏃	1号墳玄室フルイガケ	残存長4.2 最大幅0.5 重さ3.5 g			
12	須恵器	杯蓋	1号墳羨道部（遺物群A）	①12.0 ②4.2	外面：天井部外面回転ヘラケズリ、 他は回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：不良 C：内7.5YR7/4 に近い橙色 外7.5YR7/4 に近い橙色～7.5Y4/3 褐色	天井部外面ヘラ 記号あり
13	須恵器	杯身	1号墳羨道部（遺物群B）	①10.8 ②3.95 受部径13.0	外面：底部手持ちヘラケズリ後ナデ、 他は回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：不良 C：内7.5YR6/3 に近い褐色 外7.5YR5/3 に近い褐色～10YR8/4 浅黄褐色	底部外面ヘラ 記号あり
14	須恵器	杯身	1号墳羨道部（遺物群B）	①11.5 ②4.5 受部径13.5	外面：底部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：不良 C：内5YR5/3 に近い赤褐色 外5YR5/2 灰褐色	底部外面ヘラ 記号あり
15	須恵器	杯蓋	1号墳羨道右側壁側黒色土	① (9.55) ② (2.6) 受部径 (11.8)	外面：天井部ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	A：微細な白色・黒色砂粒・長石を含む B：良好 C：内10YR6/1 黄灰色 外2.5YR7/2 灰黄色～2.5Y7/1 灰白色	外面降灰
16	須恵器	杯身	1号墳羨道右側壁側黒色土	② (3.9) ③8.7	外面：底部外面ヘラケズリ、他は回転ナデ 体部中に2条の沈線が巡る 内面：ナデ、回転ナデ	A：微細～1mm程の白色・黒色砂粒を含む B：良好 C：内2.5Y6/1 黄灰色 外2.5YR8/1 灰白色～5Y5/1 灰色	
17	須恵器	杯身	1号墳羨道右側壁側黒色土 1号墳墓道横断ベルト除去時	① (11.9) ②3.9 ③8.35	外面：底部外面ヘラケズリ、他は回転ナデ 体部中に2条の沈線が巡る 内面：ナデ、回転ナデ	A：微細な白色・黒色砂粒・長石を含む B：良好 C：内2.5Y6/1 黄灰色 外2.5YR8/1 灰白色～5Y5/2 灰色	
18	須恵器	碗	1号墳羨道右側壁側黒色土	① (10.2) ② (5.25)	内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：10YR6/3 に近い黄褐色	
19	須恵器	高杯	1号墳羨道部（遺物群A）	①10.4 ②11.05 脚部径8.7	外面：杯部は底部ヘラ切り後ナデ、一部カキメ、 体部に3条の沈線が巡る。脚部は回転ナデ、 中位に2条の沈線が巡る。 内面：杯部はナデ、回転ナデ。脚部は回転ナデ。	A：微細～2mm程の白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：N4/ 灰色～2.5Y5/2暗灰黄色	脚部内面ヘラ 記号あり
20	須恵器	高杯	1号墳羨道部（遺物群A）	①8.95 ③10.85 脚部径 (8.8)	外面：杯部下半～脚部中位にかけてカキメ、 他回転ナデ、体部に3条の沈線が巡る。脚部に 2条の沈線が巡る。 内面：杯部はナデ、回転ナデ。脚部は回転ナデ。	A：微細～3mm程の白色・黒色砂粒・雲母を 含む B：良好 C：N4/ 灰色～2.5Y6/1 黄灰色	外面降灰
21	須恵器	直口壺	1号墳羨道部	①6.0 ②11.0 ③5.0 ⑤14.0	外面：胴部下端～底部外面回転ヘラケズリ、 頸部外面～底部外面カキメ 内面：回転ナデ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内N5/ 灰色 外N4/ 灰色	底部外面ヘラ 記号あり
22	須恵器	平瓶	1号墳羨道部（遺物群A）	①5.1 ②11.1 ③3.8 ⑤13.8	外面：底部回転ヘラケズリ、胴部カキメ 頸部内外面ユビオサエ 内面：回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内5Y6/1 灰色 外7.5YR6/3 に近い褐色～5Y5/1灰色	胴部外面ヘラ 記号あり
23	須恵器	平瓶	1号墳羨道右側壁側黒色土	① (7.8) ⑤17.0 頸部径5.0	外面：底部回転ヘラケズリ、胴部カキメ 頸部内外面ユビオサエ 内面：回転ナデ	A：微細～3mm程の白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：10YR6/1 褐灰色～N5/ 灰色	口縁部降灰
24	須恵器	平瓶	1号墳羨道部（遺物群A）	①5.8 ②15.6 ⑤15.6	外面：底部ヘラ切り、胴部下端回転ヘラ ケズリ、肩部タタキ後回転ナデ、頸部カキメ 内面：回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内7.5YR5/1 褐灰色～N5/ 灰色 外7Y7/1 灰白色～N4/ 灰色	口縁部内面～ 肩部外面降灰
25	須恵器	不明	2号墳周溝表土	② (2.5)	内外面回転ナデ	A：微細な砂粒を含む B：良好 C：内7.5Y4/1 灰色 外N3/ 暗灰色	
26	須恵器	杯蓋	2号墳周溝黒色土	② (3.95)	内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内2.5Y5/2 暗灰黄色 外10YR4/1 褐灰色	
27	縄文土器	不明	2号墳周溝土層ベルト除去時	② (3.15) ③ (6.0)	内外面調整不明	A：微細～3mm程の白色砂粒・雲母を多量に 含む B：良好 C：内5YR5/4 に近い赤褐色 外2.5YR5/6 明赤褐色	

版 圖



(1) 1号墳全景写真（南から）



(1) 1号墳調査前全景①
(南から)



(2) 1号墳調査前全景②
(南から)



(3) 1号墳墳丘東西土層
(南西から)

(1) 1号墳墳丘南北土層
(西から)



(2) 1号墳周溝土層
(南から)



(3) 1号墳墳丘遺存状況
(南西から)





(1) 1号墳羨道検出状況
(南東から)



(2) 1号墳羨道右側壁
(南西から)



(3) 1号墳羨道左側壁
(南東から)

(1) 1号墳玄室床面検出状況
(南から)



(2) 1号墳玄門 (北から)



(3) 1号墳玄室奥壁 (南から)





(1) 1号墳玄室右側壁玄門側隅部（北西から）



(2) 1号墳玄室右側壁奥壁側隅部（南西から）



(3) 1号墳玄室左側壁玄門側隅部（北東から）



(4) 1号墳玄室左側壁奥壁側隅部（南東から）

(1) 1号墳羨道遺物出土状況①
(南東から)



(2) 1号墳羨道遺物出土状況②
(南西から)



(3) 1号墳羨道遺物出土状況③
(南東から)





(1) 1号墳閉塞石検出状況
(南東から)



(2) 1号墳羨道土層
(東から)



(3) 1号墳調査状況
(南東から)

(1) 2号墳調査前全景
(南西から)



(2) 2号墳周溝土層 (南東から)



(3) 2号墳完掘状況 (南東から)





(1) 2号墳玄室落ち込み状況
(南東から)



(2) 3号墳全景 (南東から)



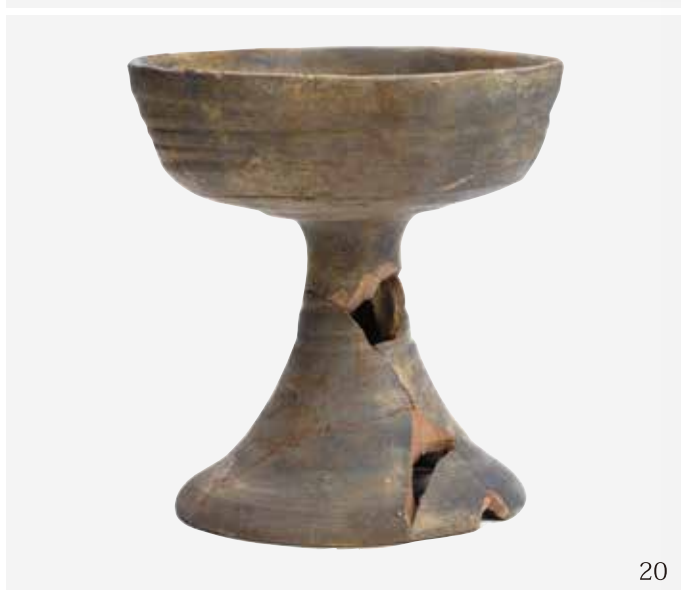
(3) 2号墳から1号墳を望む
(北東から)



(1) 1号墳羨道遺物集合



(2) 出土遺物 1



報告書抄録

ふりがな	かみからやまいせき							
書名	上唐山遺跡 1							
副書名	第 1 次調査							
巻次	1							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 192 集							
編著者名	山元 瞭平							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町 2-2-1 電話 092（501）2211							
発行年月日	2022 年 3 月 31 日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみからやま 上唐山遺跡第1次	ふくおかけんおおのじょうしおおあざおとがな 福岡県大野城市大字乙金 1121 番 1	402192		130° 30′ 1″	33° 33′ 8″	2021 年 1 月 6 日 ～ 2021 年 3 月 29 日	1,000 m ²	法面保護工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上唐山遺跡第1次	古墳	古墳時代	古墳	須恵器、鉄製品、 銅製品				
要 約	上唐山遺跡は乙金山から北西へ派生する丘陵上に位置する。今回は 2 期の古墳を調査した。1 号墳は円墳（楕円形）で、単室両袖式の横穴式石室である。7 世紀初頭の築造とみられる。周囲の古墳のなかでも、傑出して高位の標高に位置する。2 号墳は円墳で、横穴式石室を主体部とするが、未調査のため詳細は不明である。7 世紀前半に位置づけられる。							

ふりがな	かみからやまいせき							
書名	上唐山遺跡 1							
副書名	第 1 次調査							
巻次	1							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 192 集							
編著者名	山元 瞭平							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町 2-2-1 電話 092（501）2211							
発行年月日	2022 年 3 月 31 日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみからやま 上唐山遺跡第1次	ふくおかけんおおのじょうしおおあざおとがな 福岡県大野城市大字乙金 1121 番 1	402192		130° 30′ 1″	33° 33′ 8″	2021 年 1 月 6 日 ～ 2021 年 3 月 29 日	1,000 m ²	法面保護工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上唐山遺跡第1次	古墳	古墳時代	古墳	須恵器、鉄製品、銅製品				
要 約	上唐山遺跡は乙金山から北西へ派生する丘陵上に位置する。今回は 2 期の古墳を調査した。1 号墳は円墳（楕円形）で、単室両袖式の横穴式石室である。7 世紀初頭の築造とみられる。周囲の古墳のなかでも、傑出して高位の標高に位置する。2 号墳は円墳で、横穴式石室を主体部とするが、未調査のため詳細は不明である。7 世紀前半に位置づけられる。							

ふりがな	かみからやまいせき							
書名	上唐山遺跡 1							
副書名	第 1 次調査							
巻次	1							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 192 集							
編著者名	山元 瞭平							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町 2-2-1 電話 092（501）2211							
発行年月日	2022 年 3 月 31 日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみからやま 上唐山遺跡第1次	ふくおかけんおおのじょうしおおあざおとがな 福岡県大野城市大字乙金 1121 番 1	402192		130° 30′ 1″	33° 33′ 8″	2021 年 1 月 6 日 ～ 2021 年 3 月 29 日	1,000 m ²	法面保護工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上唐山遺跡第1次	古墳	古墳時代	古墳	須恵器、鉄製品、銅製品				
要 約	上唐山遺跡は乙金山から北西へ派生する丘陵上に位置する。今回は 2 期の古墳を調査した。1 号墳は円墳（楕円形）で、単室両袖式の横穴式石室である。7 世紀初頭の築造とみられる。周囲の古墳のなかでも、傑出して高位の標高に位置する。2 号墳は円墳で、横穴式石室を主体部とするが、未調査のため詳細は不明である。7 世紀前半に位置づけられる。							

大野城市文化財調査報告書 第192集

上唐山遺跡1

令和4年3月31日

発行 大野城市教育委員会

〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 有限会社 成光社

〒815-0082 福岡県福岡市南区大楠
1-29-33